

悪獣篇

泉鏡花

青空文庫

つれの夫人がちよつと道寄りをしたので、銚太郎は、取附きに山門の峨々と聳えた。巨剎の石段の前に立留まつて、その出て来るのを待ち合せた。

門の柱に、毎月十五十六日当山説教と貼紙した、傍に、東京……中学校水泳部合宿所とまた記してある。透して見ると、灰色の浪を、斜めに森の間にかけたような、棟の下に、薄暗い窓の数、巖穴の趣して、三人五人、小さくあちこちに人の形。脱ぎ棄てた、浴衣、襦袢、上衣など、ちらちらと渚に似て、黒く深く、背後の山まで凹になつたのは本堂であろう。輪にして段々に点した蠟の灯が、黄色に燃えて描いたよう。

向う側は、袖垣、枝折戸、夏草の茂きが中に早咲の秋の花。いづれも此方を背戸にして別荘だちが二三軒、廂に海原の緑をかけて、簾に沖の船を縫わせた拵え。芻釣瓶の竹も動かず、蚊遣の煙の靡くもなき、夏の盛の午後四時ごろ。浜辺は煮えて賑かに、町は寂しい樹蔭の細道、たらたら坂を下りて来た、前途は石垣から折曲る、しばらくここに窪んだ処、ちようどその寺の苔蒸した青黒い段の下、小溝があつて、しばまぬ月草、紺青

の空が漏れ透くかと、露もはらはらとこぼれ咲いて、藪は自然の寺の垣。

ちようどそのたらたら坂を下りた、この竹藪のはずれに、草鞋、草履、駄菓子わらじの箱など店に並べた、屋根は茅かやぶきの、且つ破れ、且つ古びて、幾秋いくあきの月や映し、雨や漏りけん入口の土間なんど、いにしへの沼の干かたまつたをそのままらしい。廂は縦に、壁は横に、今も屋台は浮き沈み、危あやうく掘立ほったての、柱々、放ばなれ放ばなれに傾かたんでいるのを、渠かれは何心なく見て過ぎた。連れはその店へ寄つたのである。

「昔……昔、浦島は、小児こどもの捉とらえし亀を見て、あわれと思ひ買かい取りて、……」と、誦すむともなく口にしたのは、別荘のあたりの夕間暮れに、村の小児等こどもらの唱うのを聞き覚えが、折まから心に移つたのである。

銚太郎は、ふと手にした巻まきた 蓑たばこに心着いて、唄をやめた。

「早附木マツチを買いに入ったのかな。」

うっかりして立たつたのが、小店こみせの方に目めを注ついで、

「ああ、そうかも知れん。」と夏帽なつぼうの中で、頷うなずいて独ひとりごと言こと。

別に心に留めもせず、何の気もなくなると、つい、うかうかと口へ出る。

「一日あるひ大きな亀が出て、か。もうしもうし浦島さん——」

帽を傾け、顔を上げたが、藪に並んで立ったのでは、此方の袖に隠れるので、路を対方へ。別荘の袖垣から、斜に坂の方を透かして見ると、連の浴衣は、その、ほの暗い小店に艶なり。

「何をしているんだろう。もうしもうし浦島さん……じゃない、浦子さんだ。」

と破顔しつつ、帽のふちに手をかけて、伸び上るようにしたけれども、軒を離れそうにもせぬのであった。

「店ぐるみ総じまいにして、一箇々袋へ入れたって、もう片が附く時分じゃないか。」

と呟くうちに真面目になった、銚太郎は我ながら、

「串戯じゃない、手間が取れる。どうしたんだろう、おかしいな。」

二

とは思ったが、歴々彼処に、何の異状なく在んだのが見えるから、憂慮にも及ばない。念のために声を懸けて呼ぼうにも、この真昼間。見える処に連を置いて、おおいおおいも茶番らしい、殊に婦人ではあるし、と思う。

今にも来そうで、出向く気もせず。火のない巻まきたばこ 蓑かさを手にしたまま、同じ処ところにゐんで、じつと其方そなたを。

何なんとなくぼんやりして、ああ、家も、路みちも、寺も、竹藪たけやぶを漏る蒼空あおぞらながら、地つちの底の世にもなりはせずや、連つれは浴衣の染色そめいろも、浅き紫陽花あじさいの花になって、小溝こみぞの暗やみに倂おとものみ。我はこのまま石になって、と氣の遠くなつた時、はつと足が出て、風が出て、婦人おんなは軒を離れて出た。

小走りに急いで来る、青葉の中に寄る浪のはらはらと爪つまさき 尖とが白く、濃い黒髪くろかみの房ふさやかな双びんづらの鬢あざき、浅葱あざきの紐ひもに結び果てず、海水帽うみずぼうしを絞しぼつて被かぶつた、豊ゆたかな頬ほおに艶つややかに靡なびいて、色の白しろいが薄化粧うすけい。水みづ色いろ縮ちぢ緬めんの蹴出けだしの褌つま、はらはら蓮はちすつぽの荅みさばを捌さばいて、素足すそながら清らかに、草履くさりばきの埃ほこりも立たず、急いで迎えた少年に、ばったりと藪くさの前。

「叔母さん、」

と声をかけて、と見るとこれが音に聞えた、燃もゆるような朱の唇くちびる、ものいいたさを先んじられて紅梅べにばいの花揺ゆぐよう。黒目勝くろめがちの清すずしやかに、美しくすなおな眉まゆの、濃こきにや過あぐると煙けむりつたのは、五日月いつかつぎに青柳あおやぎの影かげやや深こき趣きあり。浦子うらこというは二十七。

豪商狭島さじまの令室れいしつで、銚太郎しやうたろうには叔母おばに当ある。

この路を去る十二三町、停車場寄の海岸に、石垣高く松を繞らし、廊下で繋いで三棟に分けた、門には新築の長屋があつて、手車の車夫の控える身上。

裳を厭う砂ならば路に黄金を敷きもせん、空色の洋服の褌を取つた姿さえ、身になえば唐めかで、羽衣着たりと持て囃すを、白襟で襲衣の折から、羅に綾の帯の時、湯上りの白粉に扱帯は何というやらん。この人のためならば、このあたりの浜の名も、狭島が浦と称えつびよう、リボンかけたる、笄したる、夏の女の多い中に、海第一と聞えた美女。帽子の裡の日の蔭に、長いまつげのせいならず、颯を見た目に冴がなく、顔の色も薄く曇つて、

「銚さん。」

とばかり云つた、浴衣の胸は呼吸せわしい。

「どうしたんです、何を買つていらしたんです。吃驚するほど長かった。」
 打見うちみに何の仔細しさいはなきが、物怖ものおじしたらしい叔母さまの状さまを、たかだか例の毛虫もうちゅうだろう、と笑いながら言う顔を、情なさけらしく熟じつと見て、

「まあ、呑気のんきらしい、早附木マツチを取つて上げたんじゃありませんか。」
 はじめて、ほつとした様子。

「頂戴！ いくつかの靴以来です。こうは叔母さんでなくツちや出来ない事です。僕もそうだろうと思っただんです。」

「そうだろうじやありませんわ。」

「じや、早附木ではないんですか。」

三

「いいえ、銚さんが煙草たばこを出すと、早附木マツチがないから、打棄うつちやっておくと、またいつものように、煙草には思い遣りやがない、監督のようだなんて云うだろうと思つて、気を利かして、ちようど、あの店で、」

と身を横に、踵かかとを浮かして、恐いもののように振返つて、

「見附かつたからね、黙つて買つて上げようと思つて入ったんですがね、お庇かけで大変な思ひをしたんですよ。ああ、恐かつた。」

とそのままには足も進まず、がツかりしたような風情である。

「何が、叔母さん。この日中ひなかに何が恐いんです。大方また毛虫でしょう、大丈夫、毛虫は

追駈おつかけては来ませんから。」

「毛虫どころじゃありません。」

と浦子は後見うしろらるる状さま。声も低う、

「銑さん、よつぼどの間だったでしょう。」

「ぎつと一時間……」

半分は懸直かけねだったのに、夫人はかえってさもありそうに、

「そうでしたかねえ、私はもつとかと思つたくらい。いつ、店を出られるだろう、と心細
いッたらなかつたよ。」

「なぜ、どうしたんですね、一体。」

「まあ、そろそろ歩行あるきましよう。何だか気草きくたび臥れでもしたようで、頭も脚もふらふらし
ます。」

歩を移すのに引添うて、身体からだで庇かばうがごとくにしつつ、

「ほんとに驚いたんですか。そういえば、顔の色もよくないようですよ。」

「そうでしょう、悚然ぞつとして、未だいまに寒気がしますもの。」

と肩すぼを窄めて俯向うつむいた、海水帽も前下り、頸白うなじく悄しおれて連立つ。

少年は顔を斜めに、近々と帽の中。

「まったく色が悪い。どうも毛虫ではないようですね。」

これには答えず、やや石段の前を通った。

しばらくして、

「銑さん、」

「ええ、」

「帰途に、またここを通るんですか。」

「通りますよ。」

「どうしても通らねば不可いけませんかねえ、どこぞ他ほかに路がないんでしょうか。」

「海ならあります。ここいらは叔母さん、海岸の一筋路わかれみちですから、岐路わかれみちといつては背う

後しろの山しろへ行くより他ほかにはないんですが、」

「困りましたねえ。」

と、つくづく云う。

「何ね、時刻に因しおつて、汐しおの干しおている時は、この別荘の前なんか、岩を飛んで渡られますがね、この節の月じやどうですか、晩方干しおないかも知れません。」

「船はありますか。」

「そうですね、渡船わたしぶね ツて別にありはしますまいけれど、頼んだら出してくれないこともないでしょう、さきへ行つて聞いて見ましょう。」

「そうですね。」

「何、叔母さんさえ信用するんなら、船だけ借りて、漕ぐことは僕にも漕げます。僕じゃ危険けんけんだというでしょう。」

「何でも可ようござんすから、銚さん、貴郎あなた、どうかして下さい。私はもう帰途かえりにあの店の前を通りたくないんです。」

とまた俯向うつむいたが恐こわ々ごわらしい。

「叔母さん、まあ、一体、何ですか。」と、余りの事に微笑ほほえみながら。

四

「もう聞えやしますまいね。」

と憚はばる所あるらしく、声もこの時なお低い。

「何が、どこで、叔母さん。」

「あすこまで、」

「ああ！ 汚きたなみせ店へ、」

「大きな声をなさんなよ。」と吃驚びつくりしたように慌しく、瞳ひとみを据えて、密そつという。

「何が聞えるもんですか。」

「じゃあね、言いますけれど、銚ちやうさん、私わたしがね、今、早附木マツチを買いに入ると、誰も居ないのよ。」

「へい？」

「下したさいな、下したさいなツて、そういうとね。穴あなが開いて、こわれごわれで、鼠ねずみの家の三階建さんかいけんのような、取附とつつきの三段さんだんの古棚ふるなげの背うしろのね、物置もの置きみたいな暗くらい中なかから、——藻屑もくずを曳ひいたかと思う、汚ない服装ふくそうの、小こさな婆ばあさんがね、よぼよぼと出て来きたんです。

髪かみの毛けが真ま白しろでね、かれこれ八十はちじゅうにもなろうかというんだけれど、その割わりには皺しわがないの、……顔かほに。……身体からだは瘦やせて骨ほねばかり、そしてね、骨ほねが、くなくなど柔なかそうに腰こしを曲まげてさ。

天窓あたまでもものを見るてツたように、白髪しらかみを振ふって、ふツふツと息いきをして、脊せきの低ひいのが、

そうやって、胸を折ったから、そこらを這うようにして店へ来るじやありませんか。

早附木を下さいなツて、云ったけれど聞えませぬ。もつともね、はじめから聞えないのは覚悟だというように、顔を上げてね、人の顔を視めてさ。目で承りましようと言うんじゃないの。

お婆さん、早附木を下さい、早附木を、といった、私の唇の動くのを、熟と視めていたツけがね。

その顔を上げているのが大儀そうに、またがツくり俯向くと、白髪の中から耳の上へ、長く、干からびた腕を出したんですがね、掌が大きい。

それをね、けだるそうに、ふらふらとふつて、片々の人指ゆびで、こうね、左の耳を教えるでしょう。

聞えないと云うのかね、そんなら可うござんす。私は何だか一目見ると、厭な心持がしたんですからね、買わずと可いから、そのまま店を出ようと思うと、またそう行かなくなりましたわ。

弱るじやありませんか、婆さんがね、けだるそうに腰を伸ばして、耳を、私の顔の傍へ横向けに差しつけたんです。

ぷんと臭つたの。何とも言えない、きなツくさいような、醬油おしたじの焦げるような、厭いやな臭においよ。」

「や、そりや困りましたね。」と、これを聞いて少年も顰ひそんだのである。

「早附木を下さい。」

(はあ?)

(早附木よ、お婆さん。)

(はあ?)

はあツて云うきりなの。目を眠つて、口を開けてさ、臭うでしょう。

(早附木、) ツて私は、まったくよ。銑せんさん、泣きたくなつたの。

ただもう遁にげ出したくツてね、そこいらみまわすけれど、貴下あなたの姿も見えなかつたんですも

の。

はあ、長い間よ。

それでもようよう聞えたと見えてね、口をむぐむぐとさして合点がってん々々をしたから、また手間を取らないようにと、直ぐにね、銅貨を一つ渡してやると、しばらくして、早附木を一ダース。

そんなには要らないから、包を破いて、自分で一つだけ取って、ああ、厄落し、と出よう、とすると、しつかりこの、」

と片手を下に、袖をかさねた袂を揺つたが、気味悪そうに、胸をかわして密と払い、

「袂をつかまえたのに、引張られて動けないじゃありませんか。」

「かさねがさね、成程、はあ、それから、」

五

「私や、銚さん、どうしようかと思つたんです。

何にも云わないで、ぐんぐん引張つて、かぶりを掉るから、大方、剩錢を寄越そうというんでしようと思つて、留りますとね。

やツと安心したように手を放して、それから向う向きになつて、縊から穴のあいたのを一つ一つ。

それがまたしばらくなの。

私の手を引張るようにして、掌へ呉れました。

ひやりとしたけれど、そればかりなら可かつたのに。

(御新姐様や)

と浦子の声、異様に震えて聞えたので、

「ええ、その婆が、」

「あれ、銚さん、聞えますよ。」と、一歩いそがわしく、ぴったり寄添う。

「その婆が、云つたんですか。」

夫人はまた吐息をついた。

「婆さんがね、ああ。」

(御新姐様や、御身ア、すいたらしい人じやでの、安く、なかまの値で進ぜるぞい。) ツ
て、皺枯れた声でそう云うとね、ぶんと頭へ響いたんです。

そして、すいたらしいツてね、私の手首を熟と握って、真黄色な、平たい、小さな顔を振上げて、じろじろと見詰めたの。

その握つた手の冷たい事ツたら、まるで氷のようじやありませんか。そして目がね、黄金目なんです。

光つたわ！ 貴郎。

キラキラと、その凄^{すじ}かつた事。」

とばかりで重^{つむり}そうな頭^{あたま}を上げて、俄^{にわ}かに黒雲や起ると思う、憂慮^{きづか}わしげに仰いで視^{なが}めた。空^{そら}ざまに目も恍惚^{うっとり}、紐^{ひも}を結^{ゆわ}えた頤^{おとが}の震^{あざ}うが見えたり。

「心持^{こころもち}でしよう。」

「いいえ、じろりと見^みられた時は、その目の光^{ひかり}で私の顔^{おんなじ}が黄色^{おんなじ}になつたかと思うくらいでしたよ。灯^{あかり}に近いと、赤^{あか}くほてるような氣^きがするのと同^{おんなじ}一^{いつ}に。

もう私^{わたし}、二^{ふた}一^{すし}条^{じょう}針^{はり}を刺^さされたように、背^せ中の兩^{りょう}方^{ほう}から悚^{ぞつ}然^{ぜん}として、足^{あし}もふらふらになりました。

夢^{ゆめ}中で二^に三^{さん}間^{げん}駈^かけ出^ですとね、ちやらんと音^ねがしたので、またハツと思^{おも}いましたよ。お錢^{あし}を落^おしたのが先^{さき}方^{ほう}へ聞^きえやしまいかと思^{おも}つて。

何^{なに}でも一^{いち}大^{だい}事^じのよう^{よう}に返^{かえ}した剩^{つり}錢^{せん}なんですもの、落^おしたのを知^しつては追^おっかけて来^きかねやしません。銚^{しやう}さん、まあ、何^{なに}てこつてしよう、どうした婆^ばさんでしようねえ。」

されば叔母^{おしほ}上の宣^{のたま}うごとし。年^{とし}紀^{なな}七^{なな}十^{じゅう}あまりの、髪^{かみ}の真^ま白^{しろ}な、顔^{かほ}の扁^{ひらた}い、年^{とし}紀^{なな}の割^{わり}に皺^{しわ}の少^{すく}い、色^{いろ}の黄^{わう}な、耳^{みみ}の遠^{とほ}い、身^{からだ}体^{たい}の臭^{にお}う、骨^{ほね}の軟^なかそうな、拳^{こぶし}動^{ふる}のくなくなした、なほその言^{ことば}に従^{したが}えば、金^{こん}色^{じき}に目^めの光^{あうな}る嫗^{おうな}とより、銚^{しやう}太郎^{たろう}は他^{ほか}に答^{こた}へる術^{すべ}を知らなかつた。

ただその、早附木^{マツチ}一つ買い取るのに、半時ばかり経^たった仔細^{しさい}が知れて、疑^{うたが}はさらりとな
くなつたばかりであるから、気の毒らしい、と自分で思うほど一向な暢気^{のんき}。

「早附木は？ 叔母さん。」と魅せられたものの背中を一つ、トンと打つようなのを唐^{だしぬ}
突^けに言った。

「ああ、そうでした。」

と心着くと、これを軀に握られた、買物を持った右の手は、まだ左の袂^{たもと}の下に包んだま
まで、撫^{なで}肩^{がた}の衿^{ゆき}をなぞえに、浴衣の筋も水に濡れたかと、ひたひたとしおれて、片袖し
るく、悚然^{ぞっ}としたのがそのままである。大事なことを見るがごとく、密^{そつ}とはずすと、銚太
郎も覗^{のぞ}くように目を注いだ。

「おや！」

「……………」

六

黒の唐繻子^{とうじゆす}と、薄^{うす}鼠^{ねずみ}に納戸^{なほ}がかつた絹ちぢみに宝づくしの絞^{しぼり}の入った、腹合せの

帯を漏れた、水紅色の扱帯しじきにのせて、美しき手は芙蓉ふようの花片はなびら、風もさそわず無事であつたが、キラリと輝いた指環ゆびわの他に、早附木マツチらしいものの形も無い。

視詰みづめて、夫人は、

「……………」ものも得えいわぬのである。

「ああ、剩つり銭と一所に遺失おとしたんだ。叔母さんどの辺？」

と気早きはやに向き返かへつて行ゆこうとする。

「お待ちなさいよ。」

と遮いつて上げた手の、仔細しさいなく動いたのを、嬉しそうに、少年の肩にかけて、見直して呼吸いきをついて、

「銚さん、お止よしなさいお止しなさい、気味が悪いから、ね、お止しなさい。」

とさも一生懸命おこ。圧おさえぬばかりに引留ひめて、

「あんなものは、今頃何なに化なっているか分かりませんよ、よう、ですから、銚さん。」

「じゃ止とめます、止とめますがね。」

少年は余りの事に、

「ははははは、何なだか妖物まじものでもあるようだ。」と半ば眩つぶやいて、また笑った。

「私は妖物としか考えないの、まさか居ようとは思われないけれど。」

「妖物ですとも、妖物ですがね、そのくなくなした処や、天窓あたまで歩行あるきそうにする処から、黄色うねく※つた処なんぞ、何の事はない婆ばばの毛虫だ。毛虫の婆ばあさんです。」

「厭いやですことねえ。」と身ぶるいする。

「何もそんなに、気味を悪がるには当たらないじゃありませんか。その婆に手を握られたのと、もしか樹の上から、」

と上を見る。藪やぶは尽きて高い石垣えのき、榎えのきが空にかぶさって、浴衣に薄き日の光、二人は月夜ゆを行く姿。

「ぼたりと落ちて、毛虫が頸筋くびすじへ入ったとすると、叔母さん、どっちが厭いやな心持だと思います。」

「沢山よ、銚さん、私はもう、」

「いえ、まあ、どっちが気味が悪いんですね。」

「そりや、だつて、そうねえ、どっちがどっちとも言えませんね。」

「そら御覧ごらんなさい。」

説き得よて可よしと思える状さまして、

「叔母さんは、その婆を、妖物か何どのように大騒ぎを遣るけれど、気味の悪い、厭な感じ。」

感じ、と声に力を入れて、

「感じというと、何だか先生の仮声のようですね。」

「気楽なことをおっしゃいよ！」

「だって、そうじやありませんか、その気味の悪い、厭な感じ、」

「でも先生は、工合の可いとか、妙なとか、おもしろい感じッて事は、お言いなさるけれど、気味の悪いだの、厭な感じだのッて、そんな事は、めったにお言いなさることはありません。」

「しかしですね、詰らない婆を見て、震えるほど恐がった、叔母さんの風ツたら……工合の可い、妙な、おもしろい感じがする、と言ったら、叔母さんは怒るでしょう。」

「当然ですわ、貴郎。」

「だからこの場合ですもの。やっぱり厭な感じだ。その気味の悪い感じというのが、毛虫とおなじぐらいだと思っただろうです。別に不思議なことは無いじゃありませんか。毛虫は気味が悪い、けれども怪しいものでも何でも無い。」

「そう言えばそうですけれど、だって婆さんの、その目が、ねえ。」

「毛虫にだって、睨まれて御覧なさい。」

「もじやもじやと白髪が、貴郎。」

「毛虫というくらいです、もじやもじやどころなもんですか、沢山毛がある。」

「まあ、貴下の言うことは、蝸牛の狂言のようだよ。」と寂しく笑ったが、

「あれ、」

寺でカンカンと鉦を鳴らした。

「ああ、この路の長かったこと。」

七

釣棹を、ト肩にかけて、処士あり。年紀のころ三十四五。五分刈のなだらかなるが、小鬢さきへ少し冗げた、額の広い、目のやさしい、眉の太い、引緊った口の、やや大きいのも凜々しいが、頬肉が厚く、小鼻に笑ましげな皺深く、下頤から耳の根へ、べたりと髯のあとの黒いのも柔和である。白地に藍の縦縞の、縮の襯衣を着て、襟のこはぜ

も見えそうに、衣紋えもんを寛ゆるく紺こん紺がすり、二三度水へ入ったろう、色は薄く地じも透いたが、糊のりりだくさん
 沢山の折目高。

薩摩下駄さつまげたの小倉こくらの緒お、太いしつかりしたおやゆびで、蝮まむしを拵しこしらえねばならぬほど、弛ゆるいばかりか、歪ゆがんだのは、水に対して石の上に、これを台にしていたのであった。

時に、釣つれましたか、獲物を入れて、片手に提ひっさぐべき畚びくは、十八九の少年の、洋服を着たのが、代りに持つて、連立つて、海からそよそよと吹く風に、山へ、さらさらと、蘆あしの葉の青く揃なつて、二尺ばかり靡なびく方へ、岸づたいに夕日を背せな。峰を離れて、一ひと刷はけの薄雲を出いでて玉のごとき、月に向つて帰途かえりみち、ぶらりぶらりということは、この人よりぞはじまりける。

「賢君、君の山越えの企ては、大層帰りが早かったですな。」

少年は莞爾にこやかに、

「それでも一抱えほど山百合を折つて来ました。帰つて御覧なさい、そりや綺麗きれです。母の部屋へも、先生の床の間へも、ちゃんと活いけるように言つて来ました。」

「はあ、それは難ありがたた有あい。朝なんざ崖がけに湧わく雲の中にちらちら燃えるようなのが見えて、もみじに朝霧がかかったという工合あいで、何となく高峰たかねの花という感じがしたのに、賢

君の丹精で、机の上に活かしたのは感謝する。

早く行つて拝見しよう、……が、また誰か、台所の方で、私の帰るのを待っているものはなかったですか。」

と小鼻の左右の線を深く、微笑を含んで少年を。

顔を見合わせて此方こなたも笑い、

「はははは、松が大層待っていました。先生のお肴さかなを頂うごうと思つて、お午飯ひるも控えたつて言つていましたつけ。」

「それだ。なかなか人が悪い。」広い額に手を加える。

「それに、母も、先生。お土産を楽しみにして、お腹をすかして帰るからつて、言づけをしたそうです。」

「益ますます々恐縮。はあ、で、奥さんはどこかへお出かけで。」

「銑せさんが一所いっ所だそうです。」

「そうすると、その連つれの人も、同じく土産を待つ方なんだ。」

「勿論です。今日ばかりは途中で叔母さんに何にも強請ねだらない。犬川で帰つて来て、先生の御馳走ごちそうになるんですつて。」

とまた顔を見る。

この時、先生愕然として頸をすくめた。

「あかぬ！ 包圍攻撃じや、恐るべきだね。就中、銚太郎などは、自分釣棹をねだつ

て、貴郎が何です、と一言の下に叔母御に拒絶された怨があるから、その崇り容易ならずと可知矣。」

と蘆の葉ずれに棹を垂れて、思わず觀念の眼を塞げば、少年は氣の毒そうに、

「先生、買つていらつしやい。」

「買う？」

「だつて一尾も居ないんですもの。」

と今更ながら畚を覗くと、冷い磯の香がして、ざらざらと隅に固まるものあり、方丈記に曰く、ごうなは小さき貝を好む。

八

先生は見ざる真似して、少年が手に傾けた件の畚を横目に、

「生憎、沙魚、海津、小鮒などを商う魚屋がなくなつて困る。奥さんは何も知らず、銚太郎なお欺くべしじやが、あの、お松というのが、また悪く下情に通じておつて、ごうなや川蝦で、鱒やおぼこの釣れないことは心得ておるから。これで魚屋へ寄るのは、落語の権助が川狩の土産に、過つて蒲鉾と目刺を買つたより一層の愚じや。

特に餌の中でも、御馳走の川蝦は、あの松がしんせつに、そこから掬つて来てくれたんで、それをちぎつて釣る時分は、浮木が水面に届くか届かぬに、ちよろり、かいず奴が攫つてしまふ。

大切な蝦五つ、瞬く間にしてやられて、ごうなになると、糸も動かさないなどは、誠に恥入るです。

私は賢君が知つとる通り、ただ釣という事におもしろい感じを持つて行るのじやで、釣れようが釣れまいが、トンとそんな事に頓着はない。

次第に困つたら、針もつけず、餌なしに試みて可いのじやけれど、それでは余り賢人めかすようで、気咎がするから、成るべく餌も附着けて釣る。獲物の有無でおもしろ味に變はないで、またこの空畚をぶらさげて、蘆の中を釣棹を担いだ処も、工合の可い感じがするのじやがね。

その様子では、諸君に對して、とてもこのまま、棹を掉つては歸られん。

釣を試みたいと云うと、奥様が過分な道具を調べて下すつた。この七本竹の継棹つぎざおなんぞ、私には勿体もったいないと思うたが、こういう時は役に立つ。

一つ畳み込んで懐ふところ中へ入れるとしよう、賢君、ちよつとそこへ休もうではないか。」

と月を見て立停たちどまつた、山の裾すそに小川を控えて、蘆が吐き出した茶店が一軒。薄い煙に包まれて、茶は沸いていそうだけれど、葦簣張よしすばりがぼんやりして、かかる天氣に、何事ぞ、雨露に朽ちたりな。

「可いいじゃありませんか、先生、畚は僕が持つていますから、松なんぞ愚ぐ々ぐ々ぐ言つたら、ぶツつけてやります。」

無二の味方で頼母たのもしく慰めた。

「いやまた、こう辟易へきえきして、棹を畳んで、懐ふところ中へ入しまい込んで、煙管筒きせるづつを忘れた、という顔で歸る処もおもしろい感じがするで。

それに咽喉のども乾いた、茶を一つ飲みましょう。まず休んで、」

と三足みあしばかり、路を横へ、茶店の前の、一間ばかり蘆が左右へ分れていた、根が白く濡ぬ地れちが透ちいて見えて、ぶくぶくと蟹かにの穴、うたかたのあわれを吹いて、茜あかねがさして、日は未いま

だ高いが虫の声、艫を漕ぐように、ギイ、ギツチヨツ、チヨ。

「さあ、お掛け。」

と少年を、自分の床几の傍に居らせて、先生は乾くと言った、その唇を撫でながら、
「茶を一つ下さらんか。」

暗い中から白い服装、麻の葉いろの巻つけ帯で、草履の音、ひた——ひた、と客を見て
早や用意をしたか、蟋蟀の囁つた塗盆に、朝顔茶碗の亀裂だらけ、茶渋で錆びたの
を二つのせて、

「あがりまし、」

と据えて出し、腰を屈めた嫗を見よ。一筋ごとに美しく櫛の歯を入れたように、毛筋が
透つて、生際の揃つた、柔かな、茶にやや褐を帯びた髪の色。黒き毛、白髪しらの塵ばかり
をも交えぬを、切髪きりかみにプツリと下げた、色の白い、艶つやのある、細面ほそおもての頤尖つて、鼻
筋の衝と通つた、どこかに気高い処のある、年紀は誰が目も同一……である。

「渺々乎として、蘆じや。お婆さん、好景色だね。二三度来て見た処ぢやけれど、この店の工合が可いせいいか、今日は格別に広く感じる。

この海の他に、またこんな海があるうとは思えんくらいじや。」
と頷くように茶を一口。茶碗にかかるほど、襯衣の袖の膨らかなので、搔抱く体に茶碗を持つて。

少年はうしろ向に、山を視めて、おつきあいという顔色。先生の影二尺を隔てず、窮屈そうにただもじもじ。

おうな 嫗は威儀正しく、膝のあたりまで手を垂れて、

「はい、申されます通り、世がまだ開けませぬ泥沼の時のような蘆原でござるわや。

この川沿は、どこもかしこも、蘆が生えてあるなれど、私が小家のまわりには、また多う茂つてござる。

秋にもなつて見やしやりませ。丈が高う、穂が伸びて、小屋は屋根に包まれる、山の懐も隠れるけに、月も葉の中から出さされて、蟹が茎へ上つての、岡沙魚というものが根の処で跳ねるわや、漕いで入る船の艫の音も、水の底に陰気に聞えて、寂しくなるがの。その時稲が実るでござつて、お日和じや、今年は、作も豊年そうにござります。

もう、このように老い朽ちて、あとを頂く御菩薩の粒も、五つ七つと、算えるようになったれども、生あるものは浅間しゆうての、蘆の茂るを見るにつけても、稲の太るが嬉しゆうてなりませぬ、はい、はい。」

と細いが聞くものの耳に響く、透る声で言いながら、どこをどうしたら笑えよう、辛き浮世の汐風に、冷く大理石になったような、その仏造った顔に、寂しげに莞爾笑った。鉄漿を含んだ歯が揃って、貝のように美しい。それとなお目についたは、顔の色の白いのに、その眠ったような緞い目の、紅の糸、と見るばかり、赤く線を引いていたのである。

「成程、はあ、いかにも、」

と言ったばかり、嫗の言は、この景に對するものをして、約半時の間、未来の秋を想像せしむるに余りあつて、先生は手なる茶碗を下にも措かず、しばらく蘆を見て、やがてその穂の人の丈よりも高かるべきを思い、白泡のずぶずぶと、濡土に呖く蟹の、やがてさらさらと穂に攀じて、鉢に月を招くやなど、茫然として視めたのであった。

蘆の中に路があつて、さらさらと葉ずれの音、葦簣の外へまた一人、黒い衣の嫗が出て来た。

茶色の帯を前結び、肩の幅広く、身もやや肥えて、髪はまだ黒かったが、薄さは条を揃

えたばかり。生際はえぎわが抜け上つつて頭の半むりばから引詰ひつつめた、ぼんのくどにて小さなおぼこに、櫂かいの形こうがの筈がした、片頬かたほ痩せて、片頬かたほ肥かく、目も鼻も口も頤あごも、いびつ形なりに曲ゆがんだが、肩も横に、胸も横に、腰骨こしほねのあたりも横に、だるそうに手を組んだ、これで釣合つりあいを取るの
であろう。ただそのままでは根から崩れて、海の方へ横倒れにならねばならぬ。

肩と首とで、うそうそと、斜さめに小屋を差さ覗しのぞいて、

「ござるかいの、お婆さん。」

と、片頬夕日に眩まぶしそう、ふくれた片頬は色の悪あき、蒼あおざめて藍あいいのよう、銀色のどろりとした目、瞬またたきをしながら呼んだ。

駄菓子だかしの箱を並べた台の、陰に入しり込んで居た、此方こなたの嫗おうなが顔を出して、

「主ぬしか。やれもやれも、お達者でござるわや。」

と、ぬいと起たつと、その紅糸べにいとの目が動く。

十

来たのが口もあけず、咽喉のどでものを云うように、顔も静じつと傾かいたるまま、

「主もそくさいでめでたいぞいの。」

「お天気模様でござるわや。暑さには喘ぎ、寒さには悩み、のう、時候よければ蛙のように、くらしの蛇に追われるに、この年になるまでも、甘露の日和と聞くけれども、甘い露は飲まぬわよ、ほほほ、」

と薄笑いした、また齒が黒い。

「おいの、さればいの、お互に砂の数ほど苦しみのたねは尽きぬ事いの。やれもやれも、」
と言いながら、斜めに立つた廂の下、何を覗くか爪立つがごとくにして、しかも肩腰は造りつけたもののように、動かざること如朽木。

「若い衆の愚痴より年よりの愚痴じや、聞く人も煩さかろ、措かっしやれ、ほほほ。のう、お婆さん。主はさてどこへ何を志して出てござった、山かいの、川かいの。」

「いんにやの、恐しゆう齒がうずいて、きりきり鑿で抉るようじや、と苦しむ者があるによつて、私がまじのうて進じようと、浜への針掘りに出たらばよ、獵師どもの風説を聞かっしやれ。志す人があつて、この川ぞいの三股へ、石地藏が建つというわいの。」

それを聞いて、フト振向いた少年の顔を、ぎろりと、その銀色の目で流眄にかけたが、取つて十八の学生は、何事も考えなかつた。

「や、風説うわさきかぬでもなかつたが、それはまことでござるかいの。」

「おいのおいの、こんな難ありがた有い奇特なことを、うっかり聞いてござる年とし紀ではあるまいがや、ややお婆さん。」

主は気が長いで、大方何じやろうぞいの、地藏様開かいげん眼が済んでから、杖つえを突張つっぱつて参らしやます心じやろが、お互に年とし紀じやぞや。今の時世ときよに、またとない結縁けちえんじやに困つて、半日も早うのう、その難ありがた有い人のお姿すがた拝もうと思つての、やらやつと重たい腰こしを引ひ立てて出て来たことよ。」

紅糸べにいとの目はまた揺れて、

「奇特にござるわや。さて、その難ありがた有い人は誰でござる。」

「はて、それを知らしやらぬ。主としたものは何ということぞいの。」

このさきの浜あま際に、さるの、大長者おおちようじやどのの、お別荘べつしやうがござるてよ。その長者の奥様おくさまじやわいの。」

「それが御建立ごけんなされるかよ。」

「おいの、いんにやいの、建てさつしやるはその奥様に違ちがひないが、発願ほつがんした篤志こころざしの方はまた別にあるといの。」

聞かつしやれ。

その奥様は、世にも珍らしい、三十二相そろわした美しい方じやとの、はだ膚があたたか
じやに困つて人間よ、冷たければ天女じや、と皆いうのじやがの、その長者どののうわなり後妻
じや、うわなりでいさつしやる。

よつてその長者どのとは、三十の上も年紀が違うて、男のこ児が一人ござつて、それが今
年十八じや。

奥様は、それ、ままはは継母いの。

きたて氣立のやさしい、たまご膚も心も美しい人じやによつて、ままご継母あやまち継児というようなものではなけ
れども、なさぬなかの事なれば、万に一つもあやまち過失のないように、とその十四のおこな春ごろか
ら、おこな行の正しい、学のある先生様を、内へ頼みきりにしてそま傍へつけておかしやつた。」

二人は正にそれなのである。

十一

「よいかの、十四の年からこの年まで、四五六七八と五年の間、寝るにもおき起るにも附添う

て、しんせつにお教えなすった、その先生様のたんせいというものは、ひととおり通の事ではなかつたとの。

その効かいがあつてこの夏はの、そのお子がさる立派な学校へ入らつしやるようになったに就いて、先生様は邸やしきを出て、自分の身体からだになりたいたいといわつしやる。

それまで受けた恩があれば、お客分にして一生置き申そうということなれど、宗旨々々のお祖師様でも、行ゆきたい処へ行かつしやる。無理やりに留めますことも出来んのでう。」

「ほんにの、お婆さん。」

「今度いよいよ長者どのの邸を出さつしやるに就いて、長い間御恩になった、そのお礼心というのじゃよ。何ぞ早や、しるしに残るものを、と言うて、黄金こがねか、珠玉たまか、と尋ねさつしやるとの。

その先生様、地藏尊の一体建立して欲しいと言わされたよ。

そう云えば何となく、顔かおかたち容も柔和での、石の地藏尊に似てござるお人じゃそうなげな。」

先生は面おもてを背けて、笑えみを含んで、思わずその口のあたりを擦こすつたのである。

「それは奇特じゃ、小兒衆こどもしゆの世話を願うに、地藏様に似さしつた人は、結構にござるこ

とよ。」

「さればその事よ。まだ四十にもならつしやらぬが、慾も徳も悟ったお方じゃ。何事があつても莞爾々々とさつせえて、ついぞ、腹立たしつたり、悲しがらした事はないけに、何としてそのように難有い気になられたぞ、と尋ねるものがあるわいの。」

先生様が言わつしやるには、伝もない、教もない。私はどうした結縁か、その顔色から容子から、野中にぼんやり立たしましたお姿なり、心から地蔵様が気に入つて、明暮、地蔵、地蔵と念ずる。

痛い時、辛い時、口惜い時、怨めしい時、情ない時と、事どもが、まああつてもよ。待てな、待てな、さてこうした時に、地蔵菩薩なら何となさる、と考えれば胸も開いて、気が安らかになることじゃ、と申されたげな。お婆さん、何と奇特な事ではないかの。」

「御奇特でござるのう。」

「じゃでの、何の心願というでもないが、何かしるしをといわるるで思いついた、お地蔵一体建立をといわつしやる。」

折から夏休みにの、お邸中が浜の別荘へ来てじゃに就いて、その先生様も見えられたが、この川添の小橋の際の、蘆の中へ立てさつしやる事になって、今日はや奥さま

がの、この切通しの崖がけを越えて、二つ目の浜の石屋が方かたへ行ゆかれたげじや。

のう、先生様は先生様、また難ありがた有がいお方として、淨おたから財を喜捨なされます、その奥様の事こといの。

少わかい身みそらに、御奇特な、たとえ御自分の心からではないとして、その先生様の思おぼしめ召しに嬉うれし喜んで従したがわせえましたのが、はや菩薩みでしの御弟子みでしでましますぞいの。

七歳の竜女とやらじや。

結けちえん縁えんしよう。年をとると気忙きせわしゆうて、片時もこうしてはおられぬわいの、はやくその美しいお姿を拝まがもうと思おもうての。それで、はい、お婆さん、えッちらえッちら出て来たのじや。」

「おう、されば、これから二つ目へおざるかや。」

「さればいの、行くわいの。」

「ござれござれ。私わしも店をかたづけたら、路みちばたへ出て、その奥様の、帰かえらしゃますお顔を拝まがもうぞいの。」

赤目あかめの嫗おんなは自みづから深ふかく打うち領なづいた。

十二

時に色の青い銀の目の嫗は、対手の頤につれて、片がりながら、さそわれたように頷いたが、肩を曲げたなり手を腰に組んだまま、足をやや横ざまに左へ向けた。

「帰途のほどは宵月じや、ちらりとしたらお姿を見はずすまいぞや。かぶりものの中、気をつけさつしやれ。お方くらい、美しい、紅のついた唇は少ないとの。薄化粧に變りはのうても、膚の白いがその人じや、浜方じやで紛れはないその、可いか、お婆さん、そんなら私は行くわいの。」

「茶一つ参らぬか、まあ可いで。」

「預けましょ。」

「これは麓末なや。」

「お雑作でござりました。」

と斉しく前へ傾きながら、腰に手を据えて、てくてくと片足ずつ、右を左へ、左を右へ、一ツずつ踏んで五足六足。

「ああ、これな、これな。」

と廂ひさしの夕日に手を上げて、たそがれかかる姿を呼べば、蘆あしを裾すそなる背うしろ影かげ。

「おい、」とのみ、見も返らず、ハタと留まつて、打傾いた、耳をそのまま言ことばを待まちつ。

「主ぬし、今のことをの、坂下の姉あねさまにも知らしてやらしやれ、さだめし、あの児こも拝かみたかろ。」

聞きつけて、件くだんの嫗あね、ぶるぶると頭かぶりを掉ふつた。

「むんにやよ、年とし紀きが上あだけに、姉あねさまは御ご生しょうのことは抜ぬかぬぞの。八丈ヶ島に鐘かねが鳴なつても、うとい耳みみに聞きく人ひとじや。それに二つ目めへ行いかつしやるに、奥おく様さまは通とり路ぢ。もう先さ刻つきに拝かんだじやろうが、念ねんのためじや立た寄よりましよ。ああ、それよりかお婆おばさん、」

と片かた頬ほを青あおく捻ねじ向むかへた、鼻はな筋すぢに一つの目めが、じろりと此こ方なたを見みて光ひかりつた。

「主ぬし、数かず珠じゆずを忘わすれまいぞ。」

「おう、可よいとももの、お婆おばさん、主ぬし、そのえいの針はりを落おさつしやるな。」

「御ご念ねんには及およばぬわいの。はい、」

と言いつて、それなり前途むこうへ、蘆あしを分わければ、廂ひさしを離はなれて、一人ひとりは店みせを引ひ込こんだ。磯いその風かぜ

一ひと時とき、行ゆくものを送おくつて吹ふいて、颯さつと返かえつて、小屋こやをめぐつて、ざわざわと鳴なつて、

寂ひっそり然りした。

吻々ほほほ吻と花やかな、笑い声、浜のあたりに遥はるかに聞ゆ。

時に一碗の茶を未だ飲干さなかつた、先生はツト心着いて、いぶかしげな目で、まず、傍かたわらなる少年の並んで坐つた背を見て、また四辺あたりをみまわしたが、月夜の、夕日に返つたような思いがした。

おうなことばが渠かれを魅したか、その蘆の葉が伸びて、山の腰を蔽おほう時、水底みなそこを船が漕こいで、
おかしぜ岡沙魚さぎというもの土に跳ね、豆蟹まめがにの穂末ほすえに月を見る状さまを、目のあたりに目に浮べて、秋
の夜の月の趣に、いつか心の取られた耳へ、蘆の根の泡立つ音、葉末を風の戦そよぐ声、あた
かも天地あめつちの呖つぶやきささやくがごとく、我が身の上を語るのを、ただ夢のように聞きながら、顔
の地蔵に似たなどは、おかしと現うつにも思つたが、いつごろ、どの時分、もう一人の姫おうなが来
て、いつその姿が見えなくなつたか、定かには覚えなかつた。たとえば、そよそよと吹く
風の、いつ来て、いつ歇やんだかを覚えぬがごとく、夕日の色の、何の機ときに我が袖そでを、山陰
へ外れたかを語らぬごとく。

さればその間、およそ、時のいかばかりを過ぎたかを弁わえず、月夜とばかり思つたのも、
明るく晴れた今日である。いつの程にか、継つぎ棹やちも少年の手に畳まれて、袋に入つて、紐
までちゃんと結ゆわえてあつた。

声をかけて見ようと思う、姫は小屋で暗いから、他の一人はそこへと見遣るに、誰も無し、月を肩なる、山の裾、蘆をの寝姿のみ。

「賢、」

と呼んだ、我ながら雉子のように聞えたので、眩して、もう一度、

「賢君、」

「は、」

と快活に返事する。

「今の婆さんは幾歳ぐらに見えました。」

「この茶店のですか。」

「いや、もう一人、……ここへ来た年寄が居たでしょう。」

「いいえ。」

十三

「あれえ！ ああ、あ、ああ……」

恐こわかつた、胸むねが躍おどつて、圧おさえた乳房ちちう重いよう、忌いまわしい夢ゆめから覚さめた。——浦子うらこは、独ひとりり蚊帳かやうちの裡うち。身みの戦なくのがまだ留やまねば、腕うでを組違あえにしつかと両ふたの肩かたを抱かかいた、腋わきの下したから脈こゝろを打うつて、垂たらたらつめたと冷ひやい汗あせ。

さてもその夜よは暑あつかりしや、夢ゆめの恐おそ怖そに悶もたえしや、紅もみ裏うらの絹かいの搔まき、鳩みず尾おちをすべり退のいて、寝衣ねまきの衣紋えもん崩くれたる、雪ゆきの膚はだえに蚊帳かやの色いろ、残あり燈あけの灯あかりに青あく染そまつて、枕まくらに乱みれた鬢びんの毛けも、寝汗ねあせにしと濡ぬれたれば、襟えり白おしろい粉こも水みづの薰かおり、身みはただ、今いましも藻屑もくずの中なかを浮うび出でたかの思おもいをする。

まだ身体からだがからだらふららして、床とこの途みち中なかにあるあるような。これは寝ねた時ときに今いまも変からぬ、別べつに怪あやしい事ことではない。二ふたつ目めの浜はまの石屋いしやが方かたへ、暮方くれかた仏像ぶつぞうをあつらえに往いつた帰かえりを、厭いやな、不気味ふきみな、忌いまわしい、婆ばばのああららもの屋やの前まへが通とりたくなさに、ちちようど満潮みちしほを漕こげたから、海松布みるめの流ながれる岩いわの上うへを、船ふねで帰かえつて来きたせいでああらう。艫ろを漕こいだのは銑せんさんでああつた、夢ゆめを漕こいだのもややつぱり銑せんさん。

その時は折おり悪あしく、釣船つりふねも遊山船ゆざんぶねも出で払はらつて、船頭せんとうたちも、漁いし、地曳じびきで急いそがしいから、と石屋いしやの親方おやうが浜はまへ出でて、小船せうせんを一いち艘そう借かりてくくれて、岸きしを漕こいでおいでなさい、山やまから風かぜが吹ふけば、畳たたみを歩あるるより確たしかなもの、船ふねをひひつくりかえかええそうたたつて、海うみが合あつてあるるもの

ではねえと、大丈夫に承合うけあうし、銚太郎もなかなか素人離れがしている由、人の風説うわさも聞いているから、安心して乗つて出た。

岩の間をすらすらと縫つて、銚さんが船を持つて来てくれる間、……私は銀の粉を裏ごしにかけてような美しい砂地に立つて、足許あしもとまで藍あゐの絵具を溶いたように、ひたひた軽く寄せて来る、浪に心は置かなかつたが、またそうでもない。先刻さつきの荒物屋が背後うしろへ来て、あの、また変な声で、御新姐様ごしんぢさまや、といいはしまいかと、大抵氣を揉もんだ事ではない。……

婆さんは幾らも居る、本宅のお針も婆さんなら、自分に伯母が一人、それもお婆さん。第一近い処が、今内に居る、松やの阿母おふくろだといつて、この間隣村から尋ねて来た、それも年より。なぜあんなに恐ろしかったか、自分にも分らぬくらい。

毛虫は怪しいものではないが、一目見ても総毛立つ。おなじ事で、たとえ不気味だからといつて、ちつとも怪しいものではないと、銚さんはいうけれど、あの、黄金色こがねいろの目、黄な顔きいろ、這はうように歩行あゐいた工合。ああ、思い出しても悚然ぞつとする。

夫人は搔卷すその裾すそに障さわつて、爪尖つまさきからまた悚然ぞつとした。

けれどもその時、浜辺に一人立っていて、なんだか怪しいものなぞは世にあるものとは

思えないような、氣丈夫な考えのしたのは、自分がイんでいた七八間さきの、切立てに二丈ばかり、沖から燃ゆるような紅の日影もさせば、一面には山の緑が月に映って、練絹を裂くような、柔な白浪が、根を一まわり結んじや解けて拵がる、大きな高い巖の上に、水色のと、白衣のと、水紅色のと、西洋の婦人が三人。――

白衣のが一番上に、水色のその肩が、水紅色のより少し高く、一段下に二人並んで、指を組んだり、裳を投げたり、胸を軽くそらしたり、時々楽しそうに笑ったり、話声は聞えなかつたが、さものんきらしく、おもしろそうに遊んでいる。

それをまたその人々の飼犬らしい、毛色のいい、狛虎のような茶色の洋犬の、口の長い、耳の大きなのが、浪際を放れて、巖の根に控えて見ていた。

まあ、こんな人たちもあるに、あの婆さんを妖物か何ぞのようにな、こうまで恐がるのも、と恥かしくもあれば、またそんな人たちが居る世の中に、と頼母しく。……と、浦子は蚊帳に震えながら思い続けた。

ざんぶと浪に黒く飛んで、螺線を描く白い水脚、泳ぎ出したのはその洋犬で。来るのは何ものだか、見届けるつもりであつたらう。

長い犬の鼻づらが、水を出て浮いたむこうへ、銚さんが艀をおしておいでだった。

うしろの小松原の中から、のそのそと人が来たのに、ぎよっとしたが、それは石屋の親方で。

草履ばきでも濡れさせまいと、船がそこつた間だけ、負つてくれて、乗ると漕ぎ出すのを、水にまだ、足を浸したまま、鵜のような姿で立って、腰のふたつ提げの煙草入を抜いて、煙管と一所に手に持つて、火皿をうつむけにして吹きながら、確かなもんだ確かなもんだと、銚さんの艀を誉めていた。

もう船が岩の間を出たと思うと、尖つた舳がするりと亘つて、波の上へ乗つたから、ひやりとして、胴の間へ手を支いた。

その時緑青色のその切立ての巖の、渚で見たと趣がまた違つて、亀の背にでも乗りそうな、中ごろへ、早薄靄が掛つた上から、白衣のが桃色の、水色が白の手巾を、二人で、小さく振つたのを、自分は胴の間に、半ば袖をついて、倒れたようになりながら、帽子の裡から仰いで見た。

二つ目の浜で、地曳じびきを引く人の数は、水を切った網あみの尖さきに、二筋黒くなって砂山かけて遥はるかに見えた。

船は緑の岩の上に、浅あやぎき浅葱の浪を分け、おどろおどろ海藻の乱るあたりは、黒き瀬を抜けても過ぎたが、首くびきり沈んだり、またぶくりと浮いたり、井桁いげたに組んだ棒の中に、生簀いけすがあちこち、三々五々。鷗かもめがちらちらと白く飛んで、浜の二階家のまわり縁を、行ゆきかいする女も見え、簾すだれを上げる団扇うちわも見え、坂道の切通しを、俣くるまが並んで飛ぶのさえ、手に取るように見えたもの。

陸くがちか近ちかなれば憂きづか慮かいもなく、ただ景色の好よさに、ああまで恐ろしかった婆ばばの家、巨刹おおでらの藪やぶがそこそこと思う灘なだを、いつ漕こぎ抜けたか忘れていたのに、何を考え出して、また今の厭いなな年寄。……

——それが夢か。——

「ま、待つて、」

はてな、と夫人は、白うなじまくらき頸うなじを枕まくらに着けて、おくれ毛の音するまで、がツくりと打うちかたむいたが、身わななの戦なくことことななお留やまず。

それとも渚の砂に立つて、巖の上に、春はるあき秋の美しい雲を見るような、三人の婦人の衣きぬ

を見たのが夢か。海も空も澄み過ぎて、薄靄の風情も妙に余る。

けれども、犬が泳いでいた、月の中なら兎であらうに。

それにしても、また石屋の親方が、水に亘んだ姿が怪しい。

そういえば用が用、仏像を頼みに行くのだから、と巡礼染みたまも心嬉しく、浴衣がけ

で、草履で、二つ目へ出かけたものが、人の背で浪を渡つて、船に乗ろうとは思ひもかけぬ。

いやいや思いもかけぬといえ、荒物屋の、あの老婆。通りがかりに、ちよいとほんの燐枝を買いいに入ったばかりで、あんな、恐ろしい、忌わしい不気味なものを、しかも昼間見ようとは、それこそ夢にも知らなかつた。

船はそのためとして見れば、巖の婦人も夢ではない。石屋の親方が自分を背負つて、世話をしてくれたのも、銚さんが船を漕いだのも、浪も、鷗も夢ではなかつて、やつぱり今のが夢であらう。

——「ああ、恐しい夢を見た。」——

と肩がすくんで、裳わなわな、瞳を据えて恐々仰ぐ、天井の高い事。前後左右は、どのくらいあるか分らず、凄くて、すことさえならぬ、蚊帳に寂しき寝乱れ姿。

十五

果して夢ならば、海も同じ潮入りの蘆間あしまの水。水のどこからが夢であつて、どこまでが事実であつたか。船はもう一浪ひとなみで、一つ目の浜へ着くようになった時、ここから上つて、草臥くたびれた足でまた砂を踏ふもうより、小川尻おがわじりへ漕こぎ上つて、薦あがの葉を一またぎ、邸やしきの背戸の柿の樹へ、と銚さんの言つた事は——確たしかに今も覚えている。

艫ろよりは潮が押し入れた、川尻のちと広い処を、ふらふらと漕こぎのぼると、浪のさきが翻ひつて、潮の加減も点燈ひともしごろ。

帆柱が二本並んで、船が二艘そうかかつていた。舷ふなばたを横に通つて、急に寒くなつた橋の下、橋はし杭くいに水がひたひたする、隧トンネル道らしいも一思い。

石垣のある土手を右に、左にいつも見る目より、裾すそも近ければ頂もずっと高い、かぶさる程なる山を見つ、胴みぶくれに広くなつた、湖のような中へ、他所よその別荘の芻橋はねばしが、流ながの半なか、岸かた近かな洲すへ掛けたのが、満潮みちしおで板のも除けてあつた、箱庭の電信ひとなびばしらかと思かうよう、杭かがすすくすすくと針金さんかくなりばかり。三角形の砂地が向うに、蘆ひとなびの葉が一か靡なびき、鶴の片

翼たつばね 見るがごとく、小松も斑ふに似て十本ともとほど。

暮れ果てず灯ともしは見えぬが、その枝の中を透く青田あおたご越しに、屋根の高いはもう我が家。この小松の間を選んで、今日あつらえた地藏菩薩じぞうぼさつを――

仏様でも大事な、氏神にして祭まつり礼を、と銚さんに話しながら見て過ぎると、それなりに川が曲つて、ずつと水が狭うなる、左右は蘆びようが渺びようとして。

船がその時ぐるりと廻まわつた。

岸へ岸へと支つかうるよう。しまつた、潮が留とまつたと、銚さんが驚いて言つた。船べりは泡だらけ。瓜うりの種、茄子なすの皮、藁わらの中へ木の葉が交まじつて、船も出なければ芥あくたも流れず。真水がここまで落ちて来て、潮に逆さからつて揉もむせいで。

あせつて銚さんのおした船が、がツキと当つて杭くいに支つかえた。泡沫しぶきが飛んで、傾いた舷ふなばたへ、ぞろりとかかつて、さらさらと乱れたのは、一ひと束たばねの女の黒髪、二巻ばかり杭くいに巻いたが、下には何が居るか、泥で分らぬ。

ああ、芥にの臭においでもすることか、海松布みの香るでもすることか、船へ擲からんで散つたのは、自分おなじと同一びんみず鬢みず水のの……

――浦子は寝ながら呼吸いきを引いた。――

——今も蚊帳に染む梅花の薫かおり。——

あ、と一声退のこうとする、袖そでが風に取りられたよう、向うへ引かれて、靡なびいたので、此方こなたへ曳ひいて圧おさえたその袖に、と見ると怪しい針があつた。

蘆あしの中に、色の白い瘦やせた姫おうな、高家の後室こうけともあろう、品の可いい、目の赤いのが、朦もうろ朧うと踞しゃがんだ手から、蜘蛛くもの囿いかと思える糸いとすじ一条。

身悶みもたえして引切ひっきると、袖は針を外れたが、さらさらと髪が揺れ乱れた。

その黒髪の船に垂れたのが、逆さかさに上へ、ひよろひよると頬ほおを掠かすめると思うと——（今もおくれ毛が枕に乱れて）——身体からだが宙に浮くのであつた。

「ああ！」

船の我身は幻で、杭に黒髪の搦おぼみながら、溺おぼれていたのが自分であろうか。

また恐しい姫の手に、怪しい針に釣り上げられて、この汗、その水、この枕、その夢の船、この身体、四角な室へやも穴あなめいて、膚はだえの色も水の底、おされて呼吸いきの苦しげなるは、早あさや墳墓おくつきの中にこそ。呵呀あなや、この髪が、と思うに堪えず、我知らず、ハツと起きた。

枕を前に、翻かつた搔かき巻まを背せの力ちからに、堅いもののごとく腕かいなを解といて、密そとその鬢びんを搔かき上あげた。我が髪ながらヒヤリと冷たく、褌つまに乱れた縮ちりめん緬めんの、浅葱あさぎも色の凄すこきまで。

十六

疲れてそのまま、搔卷かいまきに頬ほおをつけたなり、浦子はうとうとしかけると、胸の動悸どうきに髪が揺れて、頭かしらを上へ引かれるのである。

「ああ、」

とばかり声も出ず、吃驚びっくりしたようにまた起直った。

扱帯しごきは一層ひとしおしやらどけして、褌つまもいとどしく崩れるのを、懶げものうに持て扱あいつつ、忙しせわく肩で呼吸いきをしたが、

「ええ、誰も来てくれないのかねえ、私が一人でこんなに、」

と重たい鬚まげをうしろへ振って、そのまま仰のげまに倒れそうな、身を揉もんで膝ひざで支えて、ハツとまた呼吸いきを吐くと、トントンと岩がけに当って、時々崖がけを洗う浪。松風が寂しんとして、夜が更けたのに心着くほど、まだ一声も人を呼んでは見ないのであった。

「松か、」

夫人は残燈ありあけに消え残る、幻のような姿で、蚊帳の中から女中を呼んだ。

けれども、直ぐに寐入ったものの呼覚される時刻でない。

第一（松、）という、その声が、出たか、それとも、ただ呼んで見ようと心に思つたばかりであるか、それさえも現である。

「松や、」と言つて、夫人は我が声に我と我が耳を傾ける。胸のあたりで、声は聞えたようであるが、口へ出たかどうか、心許ない。

まあ、口も利けなくなつたのか、と情なく、心細く、焦つて、ええと、片手に左右の胸を揺つて、

「松や、」と、急き調子でもう一度。

（松や、）と細いのが、咽喉を放れて、縁が切れて、たよりなくどこからか、あわれに寂しく此方へ聞えて、遙か間を隔てた襖の隅で、人を呼んでいるかと疑われた。

「ああ、」とばかり、あらためて、その（松や、）を言おうとすると、溜息になつてしまふ。蚊帳が煽るか、衾が揺れるか、畳が動くか、胸が躍るか。膝を組み緊めて、肩を抱いても、びくびくと身内が震えて、乱れた棲もはらはらと靡く。

引搥んでまで、撫でつけた、鬢の毛が、煩くも頬へかかつて、その都度脈を打つて血や通う、と次第に烈しくなるにつれ、上へ釣られそうな、夢の針、汀の嫗。

今にも宙へ、足が枕を離れやせん。この屋根の上に蘆が生えて、台所の煙出しが、水面へあらわれると、芥溜のごみが淀んで、泡立つ中へ、この黒髪が倒に、髻から擱まっつていようも知れぬ。あれ、そういえば、軒を渡る浜風が、さらさら水の流るる響。

恍惚と気が遠い天井へ、ずしりという沈んだ物音。

船がそこつたか、その船には銚太郎と自分が乗つて……
今、舷へ髪の毛が。

「あッ、」と声立てて、浦子は思わず枕許へすつくと立ったが、あわれこれなりに姫の針で、天井を抜けて釣上げられよう、とあるにもあられず、ばかり膝を支くと、胸を反らして、抜け出る状に、裳を外。

蚊帳が顔へ擱んだのが、芬と鼻をついた水の香。引き息で、がぶりと一口、溺るるかと思ひ飲んだ思い、これやがて気つけになりぬ。

目もようよう判然と、蚊帳の緑は水ながら、紅の絹のへり、かくて珊瑚の枝ならず。浦子は辛うじて蚊帳の外に、障子の紙に描かれた、胸白き浴衣の色、腰の浅葱も黒髪も、夢ならぬその我が姿を、歴然と見たのである。

十七

しばらくして、浦子は玉ぼやの洋燈ランプの心を挑あげて、明あかるくなった燈ともしに、宝石輝く指の尖さきを、ちよつと髻びんに触つたが、あらためてまた搔かきあ上げる。その手で襟を繕つまつて、扱帯しじぎの下で襖つまを引合わせなどしたのであるが、心には、恐ろしい夢にこうまで疲労して、息づかいさえ切ないのに、飛んだ身体からだの世話をさせられて、迷惑であるがごとき思いがした。

且つその身体を棄すてもせず、老実まめやかに、しんせつにあしらうのが、何か我ながら、身だしなみよく、床ゆかしく、優ひやしく、嬉うれしいように感じたくらい。

一つくぐつて鳩尾みすおちから膝ひざのあたりへずり下つた、その扱帯の端を引上げざまに、燈ともしを手にして、柳の腰を上へ引いてすらりと立つたが、小用こように、と思ひ切つた。

時に、障子を開けて、そこが何になつてしまつたか、浜か、山か、一里塚か、冥途めいどの路みちか。船虫が飛ぼうも、大きな油虫が駈かけ出そうも料られない。廊下へ出るのは気がかりであつたけれど、なおそれよりも恐ろしかったのは、その時まで自分が寝て居た蚊帳かやの内を窺うかがつて見ることで。

蹴けだ出しも雪の爪尖つまさきへ、とかくしてずり下り、ずり下る寝衣ねまきの襖つまをおきながら、片手で

燈をうしろへ引いて、ぼつとする、肩越のあかりに透かして、蚊帳を覗こうとして、爪立つまだてつて、前髪をそつと差寄せては見たけれども、夢のために身を悶えたもた、閨ねやの内の、情ないなさけ状さまを見るのも忌わしし、また、何となく搔卷かいまきが、自分の形に見えるにつけても、寝ていて、蚊帳を覗ううかがこの姿が透いたら、気絶しないでは済むまいと、思わずよろよろと退つてすそひつ引くるまる裳危もすゑやうく、はらりと捌さばいて廊下へ出た。

次の室は真暗で、そこにはもとより誰も居ない。

閨ねやと並んで、庭を前に三間続きの、その一室ひとまを隔てた八畳に、銚太郎と、賢之助が一つ蚊帳。

そこから別に裏庭へ突き出でた角座敷の六畳に、先生が寝ている筈はず。

その方ほうにも廁かわやはあるが、運ぶのに、ちと遠い。

くだんくだん件の次の明室あきまを越すと、取と着つきが板戸いたどになって、その台所を越した処ところに、松まつという仲なか働はば、お三と、もう一人女中が三人。

おんなおんな婦人ばかりでたよりにはならぬが、近い上に心安い。

それにちと間はあるが、そこから一目の表門の直ぐ内に、長屋だちが一軒あって、抱え車夫あかりが住んでいて、かく旦那だんなが留守の折からには、あけ方まで格子戸から灯あかりがさして、四

五人で、ひそめくもの音。ひしひしと花ふだの響ひびきがするのを、保養の場所と大目に見ても、好いいこととは思わなかつたが、時にこそよれ頼母たのもしい。さらばと、やがて廊下づたい、踵かかとの音して、するすると、裳もすその氣勢けはいの聞ゆるのも、我ながら寂しい中に、夢から覚めたしるしぞ、と心嬉しく、明室あきまの前を急いで越すと、次なる小室こべやの三畳は、湯殿に近い化粧部屋。これは障子が明いていた。

中うちから風も吹くようなり、傍正面わきしようめんの姿見に、勿な、映りそ夢の姿とて、首垂うなだるるまで顔を背そむけた。

新しい檜ひのきの雨戸、それにも顔が描かれそう。真直まつすぐに向き直つて、衝つと燈ともを差出しなが
ら、突つきあたりへ辿たど々しゆう。

十八

ばかり、閉めた杉戸の音は、かかる夜ふけに、遠くどこまで響いたろう。

壁は白いが、真暗まつくらな中に居て、ただそればかりを力にした、玄関の遠あかり、車夫部屋の例のひそひそ声が、このもの音にハタと留やんだを、気の毒らしく思うまで、今夜こよいはそ

れが嬉しかった。

浦子の姿は、無事に厠を背後にして、さし置いたその洋燈の前、廊下のはずれに、媚かしく露われた。

いささか心も落着いて、カチンとせんを、カタカタとさるを抜いた、戸締り嚴重な戸戸を一枚。半ば戸袋へするりと開けると、雪ならぬ夜の白砂、広庭一面、薄雲の影を宿して、屋根を越した月の影が、廂をこぼれて、竹垣に葉かげ大きく、咲きかけるか、今、開くと、朝の色は何々ぞ。紺に、瑠璃に、紅絞り、白に、水紅色、水浅葱、苔の数は分らねども、朝顔形の手水鉢を、朦朧と映したのである。

夫人は山の姿も見ず、松も見ず、松の梢に寄る浪の、沖の景色にも目は遣らず、瞳を恍惚見据えるまで、一心に車夫部屋の灯を、遙に、船の夢の、燈台と力にしつつ、手を遣ると、……柄杓に障らぬ。

気にもせず、なお上の空で、冷たく瀬戸ものの縁を撫でて、手をのばして、向うまで泣いたが、指にかかる木の葉もなかった。

目を返して透かして見ると、これはまた、胸に届くまで、近くあり。

直ぐに取ろうとする、柄杓は、水の中をするすると、反対まえに、山の方へ柄がひとり

で廻つた。

夫人は手のものを落したように、俯向いて熟と見る。

手水鉢と垣の間の、月の隈暗き中に、ほのぼのと白く蠢くものあり。

その時、切髪の白髪になつて、犬のごとく踞つたが、柄杓の柄に、瘦せがれた手をしかとかけていた。

夕顔の実に朱の筋の入つた状の、夢の倂をそのままに、ぼやりと仰向け、

「水を召されますかいの。」

というと、艶やかな歯でニヤリと笑む。

息とともに身を退いて、蹠踵々々と、雨戸にびつたり、風に吹きつけられたようになつて面を背けた。斜ツかいの化粧部屋の入口を、敷居にかけて廊下へ半身。真黒な影法師のちぎれちぎれな襦袢を被て、茶色の毛のすくすくと蔽われかかる額のあたりに、皺手を合せて、真俯向けに此方を拝んだ這身の婆は、坂下の藪の姉様であつた。

もう筋も抜け、骨崩れて、裳はこぼれて手水鉢、砂地に足を踏み乱して、夫人は橋に廊下へ倒れる。

胸の上なる雨戸へ半面、ぬツと横ざまに突出したは、青ンぶくれの別の顔で、途端に銀

色の眼まなこをむいた。

のさのさのさ、頭で廊下をすつて来て、夫人の枕に近づいて、ト仰いで雨戸の顔を見た、額まっかに二つ金の瞳、真赤な口を横ざまに開けて、

「ふアはははは、」

「う、うふふ、うふふ、」と傾かたがつて、戸を揺ゆつて笑うと、バチャリと柄杓を水に投げて、赤目の嫗おんなは、

「おほほほほ、」と尋常な笑い声。

廊下では、その握られた時氷のように冷たかった、といった手で、頬にかかった鬢びんの毛もを弄もてあそびながら、

「洲すの股またの御前ごぜんも、山の峽かいの婆さまも早かったな。」というと、

「坂下の姉あねさま、御苦労にごさるわや。」と手水鉢から見越して言った。

銀の目をじろじろと、

「さあ、手を貸され、連れて行いにましょ。」

「これの、吐く呼吸も、引く呼吸も、もうないかいの、」と洲の股の御前がいえば、
「水くらわしや、」

と峽の婆が邪慳である。

ここで坂下の姉様は、夫人の前髪に手をさし入れ、白き額を平手で撫でて、

「まだじゃ、ぬくぬくと暖い。」

「手を掛けて肩を上げされ、私が腰を抱こうわいの。」

と例の横あるきにその傾いた形を出したが、腰に組んだ手はそのままなり。

洲の股の御前、傍より、

「お婆さん、ちよつとその針で口の端縫わつしやれ、声を立てると悪いわや。」

「おいの、そうじやの。」と廊下でいって、夫人の黒髪を両手で压えた。

峽の婆、僅に手を解き、頤で襟を探つて、無性らしく撮み出した、指の爪の長く生伸

びたかと思えるのを、一つぶるぶると掉つて近づき、お伽話の絵に描いた外科医者と

いう体で、震く唇に幽に見える、夫人の白歯の上を縫うよ。

浦子の姿は烈しく揺れたが、声は始めから得立てなかつた。目は睜いていたのである

「もう可よいわいの、」

と峽の婆かたわら、傍かたわらに身を開くと、坂の下の姉様は、夫人の肩の下へ手を入れて、両方の傍わきを抱かかいて起した。

浦子の身は、柔かに半ば起きて凭もたれかかると、そのまま庭へずり下りて、

「ござれ、洲の股の御前、」

といつて、坂下の姉様、夫人の片手を。

洲の股の御前も、おなじく傍かたわらから夫人の片手を。

ぐい、と取つて、引立ひつたてる。右と左へ、なよやかに脇を開いて、扱しご帯の端が縁を離れた。

髪まげの根は鬻うながら、笄こうがいながら、がツくりと肩に崩れて、早や五いつあし足ばかり、釣られ工合に、

手水鉢ちようずぼらを、裏の垣根へ誘ゆわれ行く。

背後うしろに残つて、砂地に独り峽の婆くだん、件の手を腰に極きめて、傾かたがりながら、片手を前へ、

斜ひとめに一ひと煽あおり、ハタと煽ると、雨戸はおのずからキリキリと動かいて閉しまつた。

二人の婆さしはぎに挟さまれ、一いち人にんに導かれて、薄墨くぐりもんの絵のように、潜くぐり門もんを連れ出さるる時、

夫人の姿は後うしろざまに反つて、肩へ顔をつけて、振返つてあとを見たが、名残惜しそうであ

われであつた。

時しも一面の薄霞うすがすみに、処々つや艶あるよう、月の影に、雨戸は寂しんと連つらなつて、朝顔の葉を吹く風に、さつと乱れて、鼻紙がちらちらと、蓮歩れんほのあとのここかしこ、夫人をしとうて散々ちりぢりなり。

*

*

*

*

*

あと白浪しろなみの寄せては返す、渚長なぎさく、身はただ、黄なる雲を踏ふむかと、裳もすそも空に浜辺を引かれて、どれだけ来たか、海の音のただ轟々ごうごうと聞ゆるあたり。

「(こ)こじゃ、(こ)こじゃ。」

どしりと夫人の横倒よこたおし。

「来たぞや、来たぞや、」

「今は早や、氣随、氣ままになるのじやに。」

何処いずこの果はてか、砂の上。ここにも船の形の鳥が寝ていた。

ぐるりと三人、三つ鼎みなえに夫人を巻いた、金の目と、銀の目と、紅糸べにいとの目の六つを、凶あしき星のごとくキラキラと砂の上に輝かしたが、

「地蔵菩薩じぞうぼつ祭れ、ふアふア、」と嘲笑あざわらつて、山の峽かいがハタと手拍子。

「山の峽は繁昌はんじやうじゃ、あはは、」と洲すの股またの御前ごぜん、足を挙げる。

「洲の股もめでたいな、うふふ、」

と北叟ほくそえ笑みつつ、坂下の嫗おうなは腰ひねを捻ひねった。

諸声もろこえに、

「ふアふアふア、」

「うふふ、」

「あはははは。」「

「坂の下祝いいませよ。」「

今度は洲の股の御前ごぜんが手うを拍うつ。

「地藏菩薩祭れ。」「

と山の峽が一足出る、そのあとへ臀いしきを捻ひねつて、

「山の峽は繁昌はんじやじゃ。」「

「洲の股もめでたいな、」とすらりと出る。

拍子を取つて、手を拍つて、

「坂の下祝いませよ。」

据え腰で、ぐいと伸び、

「地藏菩薩祭れ。」

「山の峽は繁昌じや、」

「洲の股もめでたいな、」

「坂の下祝いませよ、」

「地藏菩薩祭れ。」

さす手ひく手の調子を合わせた、浪の調しらべ、松の曲。おどろおどろと月落ちて、世はただ霧もやとなる中に、ものの影が、躍るわ、躍るわ。

二十

ここに、一つ目と二つ目の浜境はまぎかい、浪間の巖いわを裾すそに浸して、路傍みちばたに衝つと高い、一座螺らのごとき丘がある。

その頂へ、あけ方の目を血走らして、大息を吐ついてたたずイんだのは、狭島さじまに宿れる鳥山廉平。

例の縞しまの襯衣しやつに、その緞かすりの単衣ひとえを着て、紺こくらの小倉こくらの帯おビをぐるぐると巻きつけたが、じん端折ばしよりの空脛からすねに、草履わらじばきで帽かぶは冠かぶらず。

昨日きのうは折目まげも正ただしかつたが、露つゆにしおれて甲斐かい性が無なきそう、高い処ところで投首なげくびして、太いたく草臥くたびれた状さまが見みえた。恐おそらく驚破すわといつて跳ね起きて、別荘べつしやう中ちゆう、上うへを下したへ騒さわいだ中に、襯衣しやつを着きけて一つ一つそのこはぜを掛かけたくらい、落着おちいていたものは、この人物じんぶつばかりであらう。

それさえ、夜中よなから暁あけへ引出ひきだされたような、とり留とどめのないなり形かたち、他ほかの人々ひとは思おもいやられる。

銚太郎ぢやうたろう、賢之助けんしよすけ、女中にやちゆうの松まつ、仲働なかつらき、抱かかえ車夫くるまはいうまでもない。折まから居合いあわせた賭博どぼく仲間なつかまの漁師いしやも四五人ごにん、別荘べつしやうを引ひぶるつて、八方はつぱうへ手を分わけて、急いそに姿すがたの見みえなくなつた浦子うらこを捜たづしに駈かけ廻まわる。今いましがた路みちを挟かんだ向むかう側がはの山やまの裾すそを、ちらちらと霧もやに点とまれて、松明たいまつの火ひの飛とんだもそれよ。廉平れんぺいがこの丘かみへ半はんば攀よじ上あつた頃とき、消きえたか、隠かくれたか、やがて見みえなくなつた。

もとより当あてのない尋ね人たね。どこへ、と見当みあはちつとも着きかず、ただ足あしにまかせて、彼方かなた、此方こなた、同じ処おなじところを四五度ごども、およそ二三里さんりの路みちはもう歩行あるいた。

不祥な言を放つものは、曰く厠から月に浮かれて、浪に誘われたのであろうも知れず、
と即ち船を漕ぎ出したのも有るほどで。

死んだは、活きたは、本宅の主人へ電報を、と蜘蛛手に座敷へ散り乱れるのを、騒ぐまい、騒ぐまい。毛色のかわつた犬一疋、匂の高い総菜にも、見る目、鼻の狭い土地から、佛を夢に見て、山へ百合の花折りに飄然として出かけられたかも料られぬを、狭島の夫人、夜半より、その行方が分らぬなどと、騒ぐまいぞ、各自。心して内分にお捜し申せと、独り押鎮めて制したこの人。

廉平とても、夫人が魚の寄るを見ようでなし、こんな丘へ、よもや、とは思つたけれども、さて、どこ、という目的がないので、船で捜しに出たのに対して、そぞろに雲を攫むのであつた。

目の下の浜には、細い木が五六本、ひよろひよると風に揉まれたままの形で、静まり返つて見えたのは、時々潮が満ちて根を洗うので、梢はそれより育たぬならん。ちようど引潮の海の色は、煙の中に藍を湛えて、或は十畳、二十畳、五畳、三畳、真砂の床に絶えては連なる、平らな岩の、天地の奇しき手に、鉄槌のあとの見ゆるあり、削りかけの鑪の目の立つたるあり。鑿の齒形を印したる、鋸の屑かと欠々したる、その一つ一つに、

白浪の打たで翻るとばかり見えて音のないのは、岩を飾った海松、ところ、あわび、蠣な
 どのもの、夜半に吐いた気を収めず、まだほのぼのと揺ぐのが、渚を籠めて蒸すので
 ある。

漁家二三。——深々と苦屋を伏せて、屋根より高く口を開けたり、家より大きく底を見
 せたり、ころりころりと大畚が五つ六つ。

二十一

さてこの丘の根に引寄せて、一艘苦を掛けた船があつた。海土も簀ぎる時雨かな、潮の
 ※は浴びながら、夜露や厭う、ともの優しく、よろけた松に小綱を控え、女男の波の姿に
 拵げて、すらすらと乾した網を敷寝に、舳の口がすやすやと、見果てぬ夢の岩枕。

傍なる苦屋の背戸に、緑を染めた青菜の島、結び繞らした蘆垣も、船も、岩も、ただ
 ならかな面平に、空に躍つた勿釣瓶も、靄を放れぬ黒い線。些と凹凸なく瞰下さ
 る、かかる一枚の絵の中に、裳の端さえ、片袖さえ、美しき夫人の姿を、何処に隠す
 べくも見えなかつた。

廉平は小さなその下界に對して、高く雲に乗ったように、円く靄に包まれた丘の上に、踏はずしそうに崖の尖、五尺の地蔵の像で立ったけれども。

頭を垂れて嘆息した。

さればこの時の風采は、悪魔の手に捕えられた、一体の善女を救うべく、ここに天降った菩薩に似ず、仙家の僕の誤つて廬を破つて、下界に追ひ下された哀れな趣。廉平は腕を拱いて悄然としたのである。時に海の上にひらめくものあり。

翼の色の、鳴や飛ぶと見えたのは、波に静かな白帆の片影。

帆風に散るか、露消えて、と見れば、海に露れた、一面大なる岩の端へ、船はかくれて帆の姿。

ぴたりとついて留まつたが、翻然と此方へ向をかえると、渚に据つた丘の根と、海なるその岩との間、離座敷の二三間、中に泉水を湛えた状に、路一条、東雲のあけて行く、蒼空の透くごとく、薄絹の雲左右に分れて、巖の面に靡く中を、船はただ動くともなく、白帆をのせた海が近づき、やがて横ざまに軽くまた渚に止つた。

帆の中より、水際立つて、美しく水浅葱に朝露置いた大輪の花一輪、白砂の清き浜に、台や開くと、裳を捌いて衝と下り立つた、洋装したる一人の婦人。

夜干よぼしに敷いた網の中を、ひらひらと拾ったが、朝景色を賞めずるよしして、四辺あたりを見ながら、その苦船とまぶねに立寄つて苦の上に片手をかけたまま、船の方を顧みると、千鳥は啼なかぬが友呼びつらん。帆の白きより白衣びやくえの婦人、水紅色とせいろなるがまた一人、続いて前後に船を離れて、左右に分れて身軽に寄つた。

二人は右の舷ふなばたに、一人は左の舷に、その苦船に身を寄せて、互たがいに苦を取つて分けて、船の中を差覗さしのぞいた。淡きいろいろの衣きぬの裳は、長く渚へ引いたのである。

廉平は頂の靄を透かして、足許を差覗いて、渠等かれら三人の西洋婦人、惟おもうに詭あつらえの出来を見に来たな。苦をふいて伏せたのは、この人々の注文で、浜に新造の短艇ボートでもあるのであろう。

と見ると二人の脇の下を、翻然ひらりと飛び出した猫がある。

トタンに一人の肩を越して、空へ躍るかと、もう一匹、続いて舳へさきから衝つと抜けた。最後のは前脚を揃えて海へ一文字、細長い茶色の胴ひとうねを一畝り畝あざらしたまで鮮麗あざやかに認められた。

前のは白い毛に茶の斑まだらで、中のは、その全身漆のごときが、長く掉ふつた尾の先は、舳みよしを掠かすめて失うせたのである。

二十二

その時、前後して、苦とまからいずれも面おもてを離し、はらはらと船を退のいて、ひたと顔を合あわせたが、方むき向をかえて、三人とも四あたり辺みまわをたたずさままはつきり、おぼろげながら判然と廉平の目にみおろ瞰下された。

水みず浅葱あさぎのが立樹に寄つて、そこともなく仰あいだ時、頂なる人の姿を見つけたらしい。手を挙げて、二三度つづけ続つぎまにさしまねと、あとの二人もひらひらと、高たかく手ハンケチ巾フを掉ふるのが見えた。

要こそあれ。

廉平は雲を抱いだくがごとく上から望んで、見えるか、見えぬか、慌あわただしく領うき答なずすえて、直ちに丘の上に踵くびすを回めぐらし、榮螺さざえの形に切崩した、処々足がかりの段のある坂を縫ぬって、ぐるぐると駈かけて下り、裾すそを伝つうて、衝つと高たかく、ト一ひと飛と低とく、草を踏ふみ、岩を渡わたつて、およそ十四五分時を経て、ここぞ、と思う山の根の、波なみに曝さらされた岩の上。

綱もあり、立樹もあり、大きな畚びくも、またその畚の口と肩かたずれに、船を見れば、苦く茸ふい

たり。あの位高かつた、丘は近く頭に望んで、崖の青芒も手に届くに、婦人たちの姿はなかつた。白帆は早や渚を彼方に、上からは平であつたが、胸より高く踞まる、海の中なる巖かげを、明石の浦の朝霧に島がくれ行く風情にして。

かえつて別なる船一艘、ものかげに隠れていたろう。はじめてここに見出されたが、一つ目の浜の方へ、半町ばかり浜のなぐれに隔つる処に、箱のような小船を浮べて、九つばかりと、八つばかりの、真黒な男の児。一人はヤツシと艫柄を取つて、丸裸の小腰を据え、圧すほどに突伏すよう、引くほどに仰反るよう、ただそこばかり海が動いて、舳を揺り上げ、揺り下すを面白そうに。穉い方は、両手に舳に掴まりながら、これも裸の肩で躍つて、だぶりだぶりだぶりだぶりと同ー処にもう一艘、渚に纏つた親船らしい、舫を操る児の丈より高い、他の舳へ波を浴びせて、ヤツシツシ。

いや、道草する場合でない。

廉平は、言葉も通じず、国も違つて便がないから、かわつて処置せよ、と暗示されたかのごとく、その苦船の中に何事かあることを悟つたので、心しながら、気は急ぎ、つかかと毛脛長く藁草履で立寄つた。浜に苦船はこれには限らぬから、確に、上で見ていたのをと、頂を仰いで一度。まずその二人が前に立つた、左の方の舳から、ぎくりと苦を

上へあげた。……

ざらざらと藁が揺れて、広き額を差入れて、べとりと頤髯一面なその柔和な口を結んで、足をやや爪立つまだつたと思うと、両の肩で、吃驚おどろきの腹を揉もんで、けたたましく飛び退のいて、下なる網つますに躓つまずいて倒れぬばかり、きよとんとして、太い眉ひその顰ひそんだ下に、眼まなこを円こつぷらにして四あ辺たりを眺めた。

これなる丘と相對して、対むこうなる、海おもの面おもにむらむらと蔓はびこつた、鼠色の濃き雲は、彼かしこ処こ一座の山を包んで、まだ霽はれやらぬ朝靄あさもやにて、もの凄すさましく空ひひに沖ほのおつらなつて、焰もゆの連もゆつて燃もゆるがごときは、やがて九十度を越えんずる、夏の日を海気につつんで、崖あかつちに草なき赤地あかつちへ、灰ほのかに反映するのである。

かくて一つ目の浜は、彎わんにゆう入いする、海にも浜にもこの時、人はただ廉平と、親船こを漕こぎ繞めぐる長幼二人の裸はだか児かこあるのみ。

二十三

得も言われぬ顔して、しばらく棒のごとく立っていた、廉平は何思いけん、足こなたを此方こなたに

返して、ずつと身を大きく廠いの上へ。

それを下りて、渚なぎさづたい、船ふねを弄もてあそぶ小児こどもの前へ。

近づいて見れば、渠等かれらが漕こぎ廻まわる親船おやふねは、その舳しよくを波打際なみうち。朝風あさなぎの海うみ、穩おだやかに、真砂まさごを拾ひろうばかりなれば、纜もやいも結たばず濠たわせたのに、呑氣のんきにごろりと大おほの字形なまり、楫かじを枕まくらの邯かんだ鄒し子んし、太おほい眉まゆの秀ひでたのと、鼻筋はなぢの通とつたのが、真向まのけざまの寝顔ねがほである。

傍かたわらの船ふねも、穉おきないものも、惟おもうにこの親おやの子こなのであろう。

廉平れんぺいは、ものも言いわずに駈かけ歩ある行あるいた声こゑをまず調しらえようと、打うち咳しわぶいたが、えへん！
と大きく、調子てうしはずれに響こいたので、襯衣しやつの袖口そでぐちの弛ゆるんだ手で、その口許くちぐちを蔽おほいながら、

「おい、おい。」

寝た人ねたひとには内証うちしるしらしく、低調てうてうにして小児こどもを呼よんだ。

「おい、その兄あにさん、そつちの児こ。むむ、そうだ、お前まへ達たちだ。上手うまに漕こぐな、甘うまいものだ、感心かんしんなもんじやな。」

声こゑを掛かけられると、跳はねあ上あつて、船ふねを揺ゆること木この葉はのごとし。

「あぶない、これこれ、話わがある、まあ、ちよつと静しずまれ。

おお、怜悧りこう々々、よく言うことを肯きくな。

何じや、外じやないがな、どうだ余り感心したについて、もうちツと上手な処が見せてもらいたいな。

どうじや、ずツと漕げるか。そら、あの、そら巖のもつとききへ、海の真中まで漕いで行けるか、どうじやろうな。」

寄居虫で釣る小鰻ほどには、こんな伯父さんに馴染のない、人馴れぬ里の児は、目を光らすのみ、返事はしないが、年紀上なのが、艫の手を止めつつ、けろりで、合点の目色をする。

「漕げる？　むむ、漕げる！　豪いな、漕いで見せなく。伯父さんが、また褒美をやるわ。」

いや、親仁、何よ、お前の父さんか、父爺には黙ってよ、父爺に肯くと、危いとか悪戯をするとか、何とか言つて叱られら。そら、な、可いか、黙って黙って。」
というと、また合点々々。よい、と圧した小腕ながら艫を圧す精巧な昆倫奴の器械のよう、シツと一声飛ぶに似たり。疾い事、但し揺れる事、中に乗った幼い方は、アハハアハハ、と笑つて跳ねる。

「豪いぞ、豪いぞ。」

というのも憚り、ただしまねいて褒めそやした。小船は見る見る廉平の高くあげた手の指を離れて、岩がくれにやがてただ雲をこぼれた点となんぬ。

親船は他愛がなかった。

廉平は急ぎ足に取つて返して、また丘の根の巖を越して、苦船に立寄つて、此方の船舷を横に伝うて、二三度、同じ処を行つたり、来たり。

中ごろで、踞んで畚の陰にかくれたと思うと、また突立つて、端の方から苦を撫でたり、上からそつと叩きなどしたが、更にあちこちを、して、ぐるりと舳の方へ廻つたと思うと、向うの舷の陰になつた。

苦がばらばらと煽つたが、「ああ」と息の下に叫ぶ声。藁を分けた艶なる片袖、浅葱の褌が船からこぼれて、その浴衣の染、その扱帯、その黒髪も、その手足も、ちぎれちぎれになつたかと、砂に倒れた婦人の姿。

二十四

「気を静めて、夫人、しつかりしなければ不可ません。落着いて、可いですか。心を確

にお持ちなさいよ。

判りましたか、私です。

何も恥かしい事はありません、ちつとも極りの悪いことはありませんです。しつかりなさい。

御覧なさい、誰も居ないです、ただ私一人です。鳥山たった一人、他には誰も居らんですから。」

海の方を背にして安からぬ状に附添った、廉平の足許に、見得もなく腰を落し、裳を投げて崩折れつつ、両袖に面を蔽うて、ひたと打泣くのは夫人であった。

「ほんとうに夫人、気を落着けて下さらんでは不可ません。突然海へ飛込もうとなすつたりなんぞして、串戯ではない。ええ、夫人、心が確になつたですか。」

声にばかり力を籠めて、どうしようにも先は婦人、ひとえに目を見据えて言うのみであった。

風そよそよと呼吸するよう、すすりなきの袂が揺れた。浦子は涙の声の下、

「先生、」と幽にいう。

「はあ、はあ、」

と、纒わすかに便たよりを得たらしく、我を忘れて擦り寄った。

「私わ、私は、もう死んでしまいたいのでございます。」

わツとまた忍び音ねに、身悶みもだえて突伏すのである。

「なぜですか、夫人おくさん、まだ、どうかしておいでなさる、ちやんとなさらなくツては不い可かんですよ。」

「でも、貴下あなた、私は、もう……」

「はあ、どうなすつた、どんなお心持なんですか。」

「先生、」

「はあ、どうですな。」

「私が、あの、海へ入つて死のうといたしましたのより、貴下あなたは、もっとお驚きなさいました事がございましょう。」

「……………」

何と言おうと、黙つて唾つを呑む。

「私が、私が、こんな処に船の中に、寝て、寝て、」

と泣いじやくりして、

「寝かされておりましたのに、なお吃驚びつくりなさいましてしようねえ、貴下。」

「……ですが、それは、しかし……」とばかり、廉平は言うべき術すべを知らなかった

「先生、」

これぎり、声の出ない人になろうも知れず、と手に汗を握ったのが、我を呼ばれたので、力を得て、耳を傾け、顔を寄せて、

「は、」

「ここは、どこでございます。」

「ここですか、ここは、一つ目の浜でははずを出端はずれた、崖下の突端とつばずれの処ですが、」

「もう、夜があげましたのでございますか。」

「明けたですよ。明方です、もう日が当るばかりです。」

聞くや否や、

「ええ！」とまた身を震わした。浦子はそれなり、腰を上げて立とうとして、ままならぬ身をあせつて、

「恥かしい、私、恥かしいんですよ。先生、どうしましょう、人が見ます。人が来ると不可けません、人に見られるのは厭いやですから、どうぞ死なして下さいまし、死なして下さいま

しよ。」

「と、ともかく。ですから、夫人、人が来ない内に、帰りましょう。まだ大して人通もないですから。疾く、さあ、疾く帰ろうではありませんか。お内へ行つて、まず、お心をお鎮めなさい、そうなさい。」

浦子は烈しく頭を掉つた。

二十五

為ん術を知らず黙つても、まだ頭をふるのであるから、廉平は茫然として、ただ拳を握つて、

「どうなさる。こうしていらしつては、それこそ、人が寄つて来るか分りません。第一、捜しに出ましたのでも四人や八人ではありません。」

言いも終らず、あしずりして、

「どうしましょう、私、どうしましょうねえ。どうぞ、どうぞ、貴下、一思いに死なして下さいまし、恥かしくつても、死骸になれば……。」

泣くのに半ば言消えて、

「よ、後生ですから、」

も曇れる声なり。

心弱くて叶うまじ、と廉平はやや屹としたものいいで、

「飛んだ事を！ 夫人、廉平がここに居るです。決して、決して、そんな間違はさせ
んですよ。」

「どうしましうねえ、」

はツと深く溜息つくのを、

「……………」

ただ咽喉を詰めて熟と見つつ、思わず引き入れられて歎息した。

廉平は太息して、

「まあ、貴女、夫人、一体どうなさった。」

「訳を、訳をいえば貴下、黙って死なして下さいますよ。もう、もう、もう、こんな汚
しいものは、見るのも厭におなりなさいますよ。」

「いや、厭になるか、なりませんか、黙って見殺しにしましょうか。何しろ、訳をおっし

やつて下さい。夫人、廉平です。人にいつて悪い事なら、私は盟ちかつて申しませんです。」

この人の平生はかく盟うのに適していた。

「は、申します、先生、貴下あなただけなら申します。」

「言うて下さるか、それは難ありがたい、むむ、さあ、承りましょう。」

「どうぞ、その、その前さきに先生、どこへか、人の居ない、谷底か、山の中か、島へでも、巖いわ穴あなへでも、お連れなすつて下さいまし。もう、貴下あなたにばかりも精一杯、誰にも見せられません身体からだではないんです。」

袖わすかを僅わずに濡れたる顔、夢見るように恍惚うっとりと、朝ぼらけなる醉芙蓉すいふよう、色をさました涙の雨も、露に宿つてあわれである。

「人の来ない処ところといつて、お待ちなさい、船でもどちらへか、」

と心当りがなくてもなかつた。沖の方へ見え初めて、小児こどもの船が霧もやから出て来た。

夫人は時にあらためて、世に出たような目まなこざししたが、苦船とまふねを一目見ると、目まぶちへ、颯さつと——蒼あおざめて、悚然ぞつとしたらしく肩をすくめた、黒髪おもげに、沖の方かた。

「もし、」

「は、」

「参られますなら、あすこへでも。」

いかにも人は籠こもらぬらしい、物もの凄すさまじき対岸むこうの崖、炎を宿して冥々めいめいたり。

「あんな、あんなその、地獄の火が燃えておりますような、あの中へ、」

「結構なんでございます、」と、また打うち憎しおれて面おもてを背ける。

よくよくの事なるべし。

「参りましょうか。靄はが霽はれば、ここに向い合つた同一おなじような崖下でありますけれども、途中が海で切れとるですから、浜はづたいに人の来る処ではありません。

御覧ごらんなさい、あの小児こどもの船を。大丈夫だいじう漕こぐですから、あれに乗せてもらいましょう、どうです。」

夫人は、がツくりして領うなずいた、ものを言うも切なそうに太いたく疲労して見えたのである。

「夫人おくさん、それでは。」

「はい、」

と言つて礼心に、寂しい笑顔して、吻ほっと息。

「そんな、そんな貴女、詰らん、怪しからん事があるべき次第のものではないです。汚れた身体だの、人に顔は合わされんのお言いなさるのはその事です。はははは、いや、しかし飛んだ目にお逢いでした。ちつとも御心配はないですよ。まあ、その足をお拭きなさい。突然こんな処へ着けたですから、船を離れる時、酷く濡れなすったようだ。」

廉平は砥に似て蒼き条のある滑かな一座の岩の上に、海に面して見すぼらしく踞んだ、身にただ襯衣を纏えるのみ。

船の中でも人目を厭つて、紺がすりのその単衣で、肩から深く包んでいる。浦子の蹴出しは海の色、巖端に蒼澄みて、白脛も水に透くよう、倒れた風情に休らえる。

二人は靄の薄模様。

「構わんですから、私の衣服でお拭きなさい。」

何、寒くはないです、寒いどころではないですが、貴女、裾が濡れましたで、気味が悪いでありますよう。」

「いえ、もう潮に濡れて気味が悪いなぞと、申されます身体ではありません。」と、投げたように岩の上。

「まだ、おつしやる！」

「ははは、」と廉平は笑い消したが、自分にも疑いの未だ解けぬ、蘆の中なる幻影を、この際なれば気もない風で、

「夢の中を怪しいものに誘い出されて、苦船の中で、お身体を……なんという、そんなそんな事がありますものかな。」

「それでも私、」

と、かかる中にも夫人は顔を赧らめた。

「覚えがあるのでございますもの。貴下が気をつけて下すって、あの苦船の中で漸々自分の身体になりました時も、そうでした、……まあ、お恥かしい。」

といいかけて差俯向く、額に乱れた前髪は、齒にも噛むべく怨めしそう。

「ですが、ですが、それは心の迷いです。昨日あたりからどうかなさって、お身体の工合が悪いのでしよう。西洋なぞにも、」

言の下に聞き咎め、

「西洋とおつしやれば、貴下は西洋の婦人の方が、私のつかまっておりました船の中を覗いて見て、仔細がありそうに招いたのを、丘の上から御覧なすって、それでお心着きにな

りましたつて。

その時も、苦を破つて獣が飛んで行つたとおつしやるではございませんか。

ですから私は、」

と早や力なげに、なよなよとするのであつた。

「いや、」

と当^{あて}なしに大きく言つた、が、いやな事はちつともない。どうして発^{みい}見^だしたかを怪しまれて、灣の口を横ぎつて、穉^{おきなご}児に船を漕^こがせつつ、自分が語つたは、まずその通^{とお}り。

「ですけども、何ですな。」

「いいえ」

今度は夫人から遮つて、

「もう昨日^{きのう}、二つ目の浜へ参りました途中から、それはそれは貴^{あなた}下、忌^{いま}わしい恐ろしい事ばかりで、私は何だか約束ごとのように存じます。

三十という年に近いこの年になりますまで、少^{わか}い折から何一つ苦勞ということは知りませんで、悲しい事も、辛い事もついで覚えはありません、まだ実家には両親も達者で居ます身の上ですもの。

腹の立つた事さえござんせん、余り果報な身体ですから、盈れば虧くとか申します通り、こんな恐しい目に逢いましたので。唯今ここへ船を漕いでくれました小児たちが、年こそ違いますけれども、そっくり大きいのが銚さん、小さい方が賢之助に肖ておりましたのも、皆私の命数で、何かの因縁なんでございましょうから。」

「いうことの極めて確かに、心狂える様子もないだけ、廉平は一層慰めかねる。」

二十七

夫人はわずかに語るうちも、あまたたび息を継ぎ、

「小児と申しても継しい中で、それでも姉弟とも、真の児とも、賢之助は可愛くツてなりません。ただ心にかかりますのはそれだけです、それも長年、貴下が御丹精下さいましたお庇で、高等学校へ入学も出来ましたのでございますから、きつと私の思いでも、一人前になりましたよう。」

もう私は、こんな身体、見るのも厭でなりません。ぶつぶつ切つて刻んでも棄てたいように思うんですもの、ちつとも残り惜いことにはないのですが、慾には、この上の願いには、

これが、何か、義理とか意気とか申すので死ぬんなら、本望でございませぬのに、活いきながら畜生道とはどうした因果なんでございませぬえ。」

と、心もやや落着いたか、先のように泣きもせで、濁りも去った涼しい目に、ほろりとしたのを、熟じつと見て、廉平たまた堪たまりかねた面おも色もちして、唇をわななかし、小鼻に柔らかな皺しわを刻んで、深く両手を拱こまぬいたが、噫あゝ、我かつて誓うらく、いかなる時にのぞまんとも、我心わが、我が姿、我が相好、必ず一体の地藏のごとくしかくあるべき也と、そもさんか菩薩ぼさつ。

「夫人おくさん、どうしても、貴女あなた、怪あやしい獣あやしに……という、疑うたがいは解いけんですか。」

「はい、お恥かしゆう存じます。」と手を支ついて、誰たれにか詫わび入る、そのいじらしさ。眼まなこを閉じたが、しばらくして、

「恐るべきです、恐るべきだ。夢ゆめ現うつつの貴女あなたには、悪あく獣じゆうの体たいに見えましたでありましょう。私の心けだものは獣けだものでした。夫人おくさん、懺悔ざんげをします。廉平が白状するです。貴女に恥辱を被からしたものは、四脚よつあしの獣けだものではない、獣けだもののような人間じや。

私です。

鳥山廉平一生の迷いじや、許して下さい。」と、その襯衣しやつばかりの頸うなじを垂たれた。

夫人はハツと顔を上げて、手をつきぎまに右視左瞻とみこうみつつ、背せなに乱れた千筋ちすじの黒髪、解く

べき術すべもないのであった。

「許して下さい。お宅へ参つて、朝夕、貴女あなたに接したのが因果です。賢君に対して殆んどほと献身的に尽したのは、やがて、これ、貴女に生命を捧げていたのです。

未だいま四十という年にもならんで、御存じの通り、私は、色気もなく、慾気もなく、見得もなく、およそ出世間的に超然として、何か、未来の靈光を認めておるような男であつたのを御存じでしょう。

なかなかもつ以て、未来の靈光ではなく、貴女のその美しいお姿じやつた。

けれども、到底尋常では望みのかなわぬことを悟つたですから、こんど当地の別荘をおなごりに、貴女のお傍そばを離れるに就いて、非常な手段を用いたですよ。

五年勤勞に酬むくいるのに、何か記念の品をと望まれて、悟さとりも徳もなくいなながら、ただ仏体を建てるのが、おもしろい、工合のいい感じがするで、石地藏を願いました。

今の世に、さような變つたことを言い、かわつたことを望むものが、何……をしようと
思いなさる。

廉平は魔法づかいじや。」

と石上に跏坐ふざしたその容貌ようぼう、その風采ふうさい、或はしかあるべく見えるのであつた。

夫人は、ただもの言わんとして唇のわななくのみ。

「貴女あなたも、昨日きのう、その地蔵をあつらえにおいでの途中から、怪しいものに憑つかれたとおっしゃった。……

すべて、それが魔法なので、貴女を魅して、夢ゆめ 現うつの境きように乗じて、その妄もう 執しゆうを晴はしました。

けれども余りに痛いたしい。ひとえに獣にとお思いなすつて、玉のごときそのお身からだを、砕くだいて切つても棄すてたいような御容ごよう子が、余りお可かわ哀い相そうで見みておられん。

夫人おくさん、真まの獣けよりまだこの廉平れんぺいと、思おぼし召めす方が、いくらかお心が済すむですか。」「夫人はせいせい息を切つた。

二十八

「どうですか、余り推おしつけがましい申もうし分ぶんではありますが、心はおなじ畜生でも、いくらか人間の顔に似た、口を利く、手足のある、廉平の方が可いいですか。」「口へ出すとよりは声をのんで、

「あなた
貴下、」

「……………」

「貴下、」

「……………」

「貴下、ほんとうでございますか。」

「勿論、懺悔ざんげしたのじやで。」

と、眉を開いてきつぱりという。

膝ひざでじりりとすり寄って、

「ええ、嬉しい。貴下、よくおっしゃって下さいました。」

とつかと膝に手をかけて、わつとまた泣きしずむ。廉平は我ながら、訝あやしいまで胸が
せまった。

「私と言われて、お喜びになりますほど、それほどの思おもいをなされたですか。」

「いいえ、もう、何ともたとえようはござんせん。死んでも死骸しがいが残ります、その獣の爪つめ
のあと舌のあとがあります、毛だらけな膚はだが残るのですもの。焼きましても狐狸きつねの悪い臭にお
がしましよかと、心残りがしましたのに、貴下あなた、よく、思い切ってそうおっしゃって下

さいました。快よく死なれます、死なれるんでございますよ。」

「はてさて、」

「……………」

「じゃ、やつぱり、死ぬのを思い止まっちゃ下さらん。」

顔を見合わせ、打 領うちうなずき、

「むむ、成程、」

と腕を解いて、廉平は従 容しやうようとして居直った。

「成程、そうじゃ。貴女あなたほどのお方が、かかる恥辱をお受けなさって、夢にして、ながらえておいでなさる筈はずではないのじゃった。

懺悔をいたせば、悪い夢とあきらめて、思い直して頂けることもあろうかと思っただすが、いかにも取返しのかんお身体からだにしたのじゃった、恥入ります。

夫人おくさん、貴女ばかりは殺しはせんのです。」

「いいえ、飛んだことをおっしゃいます。殿方には何でもないのでございますもの、そして懺悔には罪が消えますと申します、お怨みうらみには思いません。」

「許して下さいるか。」

「女の口から行き過ぎではございませんが、」

「許して下さい。」

「はい、」

「それではどうぞ、思い直して、」

「私はもう、」

と衝と前棲を引寄せ。岩の下を搔いくぐつて、下の根のうつろを打って、絶えず、トントンと丁々と鼓の音の響いたのが、潮や満ち来る、どツと烈しく、ざぶり砕けた波がしら、白澗を倒に、颯とばかり雪を崩して、浦子の肩から、頭から。

「あ、」と不意に呼吸を引いた。濡れしおたれた黒髪に、玉のつらなる雫をかくれば、南無三浪に攪わるる、と背を抱くの身を恠せて、観念した顔の、気高きまでに莞爾として、

「ああ、こうやって一思いに。」

「夫人、おくれはせんですよ。」と、顔につららを注いで言った。打返しがまたぎつと。「※がかかる、※がかかる、危いぞ。」

と、空から高く呼わる声。

靄が分れて、海面に兀として聳え立った、巖つづぎの見上ぐる上。草蒸す頂に人あり

て、目の下に声を懸けた、樵夫と覚しき一個の親仁。面長く髪の白きが、草色の針目衣はりめぎぬに、朽葉色の裁着たつつけは穿はいて、草鞋わらんじを爪反りつまぞや、巖端いわばなにちよこなんと平胡坐ひらあくらかいてぞいたりける。

その岩の面おもにひたとあてて、両手でごしごし一挺ちようの、きらめく刃物を悠々と磨といでいたり。

磨とぎつつ、覗のぞくように瞰下みおろして、

「上へ来さつしやい、上へ来さつしやい、浪に引かれると危いわ。」

という。浪は水晶の柱のごとく、倒さかしまにほとぼしつて、今つツ立った廉平の頭上を飛んで、空ざまに攀よずること十丈、親仁の手許の磨とぎ汁を一洗滌ひとあらい、白き牡丹ぼたんの散るごとく、巖いわか角どに翻ひつて、海面うなづらへぎつと引く。

「おじい、何を、何をしてござるのか。」と、廉平はわざと落着いて、下からまず声を送った。

「石鑿いしのみを研ぐよ。二つ目の浜の石屋に頼まれての、今度建立さつしやるといふ、地蔵様の石を削るわ。」

「や、親仁御おじいがな。」

「おお、此方衆はその註文のぬしじやろ。そうかの。はて、道理こそ、婆々どもが附き纏うぞ。」

婆々と云うよ、生死を知らぬ夫人の耳に、鋭くその鑿をもって抉るがごとく響いたので、

「もし、」と両膝をついて伸び上った。

「婆とお云いなさいますのは。」

「それ、銀目と、金目と、赤い目の奴等よ。主達が功德での、地藏様が建つたが最後じや。魔物め、居処がなくなるじやで、さまさまに祟りおって、命まで取ろうとするわ。女子衆、心配さっしやんな、身体は清いぞ。」

とて、鑿をこつこつ。

「何様それじや、昨日から、時々黒雲の湧くように、我等の身体を包みました。婆というは、何ものでござるじやろう。」と、廉平は揖しながら、手を翳して仰いで言った。

皺手に呼吸をハツとかけ、斜めに丁と鑿を押えて、目一杯に海を望み、

「三千世界じや、何でも居ようさ。」

「どこに、あの、どこに居ますのでございますえ。」

「それそれそこに、それ、主たちの廻りによ。」

「あれえ、」

「およそ其奴等^{そいつら}がなす業^{わざ}じや。夜一夜踊りおつて騒々しいわ、畜生ども、」

とハタと見るや、うしろの山に影大きく、眼^{まなこ}の光爛々^{らんらん}として、知るこれ天宮の一将星。

「動くなー!」

と喝^{かつ}する下に、どぶり、どぶり、どぶり、と浪よ、浪よ、浪よ渦^{うず}くよ。

同時に、衝^つとその片手を挙げた、掌^{たなごころ}の宝刀、稲妻の走るがごとく、射て海に入るぞと見えし。

矢よりも疾^{はや}く漕寄^{こぎよ}せた、同じ童^{わらべ}が艚^ろを押して、より幼き他の児^{ちご}と、親船に寝た以前の船頭、三体ともに船に在^あり。

斜めに高く底見ゆるまで、傾いた舷^{ふなべり}から、二人半身を乗り出して、うつむけに海を覗^{のぞ}くと思うと、鉄の腕、蕨の手、二条の柄がすつくと空、穂尖^{ほさき}を短^{みじか}に、一齐^{みつまた}に三^{みつ}又^{また}の戟^{ほこ}を構えた瞬間、豊およそ百余豊、海一面に鮮^{からくれなひ}血。

見よ、南海に巨人あり、富士山をその裾に、大島を枕にして、斜めにかかる微妙の姿。
青^{あお}嵐^{あらし}する波の彼方^{かなた}に、莊嚴^{そうげん}なること仏のごとく、端麗^{たんれい}なること美人に似たり。

怪しきものの血潮は消えて、音するばかり旭あさひの影。波を渡るか、宙ゆを行くか、白き鷺がらよ
 鳥うの片翼かたつばき、朝風に傾く帆かげや、白衣びやくえ、水紅色ときいろ、水浅葱みずあさぎ、ちらちらと波に漏れ
 て、夫人と廉平たいたすがイめる、岩山の根の巖いわに近く、忘るるばかりに漕ぐ蒼空あおぞら。魚うおあり、一
 尾ふな舷なばたに飛んで、鱗うろこの色、あたかも雪。

|| || 篇中の妖婆ようばの言葉（がぎぐげご）は凡すべて、半濁音にてお読み取り下されたく候 ||

明治三十八（一九〇五）年十二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第九卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月30日発行

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

悪獣篇

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>